四日市市埋蔵文化財発掘調査報告54

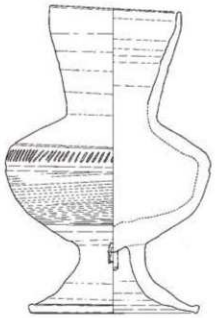
上野遺跡3・上野1号墳

二〇一八(平成三〇)年　四日市市教育委員会

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 54

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

上野遺跡3・上野1号墳



2018 年(平成 30 年)3月

四日市市教育委員会

本文目次

Ⅰ　調査に至る経過と公開・・・・・・・・・・1
1．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・1
2．文化財保護法等にかかる諸手続き・・・1
3．公開・・・・・・・・・・・・・・・・・1
4．協力依頼・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・1
1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・1
2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅲ　調査の成果～遺構～・・・・・・・・・・・7
1．古墳時代後期の遺構・・・・・・・・・・7
2．中世後期の遺構・・・・・・・・・・・・7
Ⅳ　調査の成果～遺物～・・・・・・・・・・・17
1．土器・石製品・・・・・・・・・・・・・17
2．金属製品・・・・・・・・・・・・・・・18
3．金属製品の蛍光Ｘ線分析・・・・・・・25
Ⅴ　調査のまとめと検討・・・・・・・・・・30
1．上野１号墳の位置づけ・・・・・・・・30
2．中世の遺構について・・・・・・・・・30
3．ＳＥ２０出土の石仏について・・・・・30

挿図目次

第１図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・2
第２図　上野遺跡周辺地形図・・・・・・・・3
第３図　上野遺跡第３次調査区位置図・・・・3
第４図　第３次調査区遺構配置図・・・・・・9
第５図　上野１号墳平面・側面図・・・・・・10
第６図　上野１号墳断面図・・・・・・・・・11
第７図　上野１号墳完掘状況平面図・・・・・11
第８図　上野１号墳遺物出土状況図・・・・・12
第９図　上野１号墳石室内小地区配置図・・・12
第10図　調査区北壁断面図・・・・・・・・・13
第11図　ＳＫ５平面・断面図・・・・・・・・14
第12図　ＳＫ12・15・21 土層断面図・・・・14
第13図　ＳＫ10・11・12・15・21 平面図・・15
第14図　ＳＫ14・16・17・18・19 平面・土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・16
第15図　遺物実測図①・・・・・・・・・・・20
第16図　遺物実測図②・・・・・・・・・・・21
第17図　遺物実測図③・・・・・・・・・・・22
第18図　遺物実測図④・・・・・・・・・・・23
第19図　遺物実測図⑤・・・・・・・・・・・24
第20図　茶釜持手分析結果・・・・・・・・・25
第21図　菊花双鳥鏡分析結果・・・・・・・・26

挿表目次

第１表　遺構一覧表・・・・・・・・・・・・9
第２表　金属製品一覧表・・・・・・・・・・24
第３表　遺物観察表①・・・・・・・・・・・27
第４表　遺物観察表②・・・・・・・・・・・28
第５表　遺物観察表③・・・・・・・・・・・29

写真図版

図版１　調査区全景、調査区北部全景
図版２　上野１号墳全景
図版３　上野１号墳玄室遺物出土状況
図版４　調査前状況、上野１号墳完掘状況、ＳＫ14 土層断面、ＳＫ15 土層断面、ＳＫ17、ＳＫ１９土層断面、ＳＥ２０、調査後状況
図版５　出土遺物
図版６　出土遺物
図版７　金属製品Ｘ線写真

例　言

1　本書は、宅地造成にかかる上野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査にかかる費用は、東洋地所株式会社の負担による。

3　現地調査および整理作業は、下記の体制で行った。

・調査主体　四日市市教育委員会

教育長	葛西　文雄
副教育長	栗田　さち子
教育監	吉田　隆（平成 28 年度）、上浦　健治（平成 29 年度）
理事	中村　竹雅

・調査担当　四日市市教育委員会社会教育課

社会教育課長	伊藤　伸樹（平成 28 年度）、川尻　秀納（平成 29 年度）
主幹	伊藤　裕之（平成 28 年度）
嘱託	山本　達也
嘱託	川崎　志乃
室内整理員	北野　節子　鈴木　美和子

4　報告書の作成業務は平成 29 年度に四日市市教育委員会社会教育課が行い、執筆・編集は山本達也・川崎志乃・伊藤裕之が行った。

5　遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。

6　本書に使用した遺構表示記号は、下記のとおりである。
SK：土坑　　SD：溝　　SX：墓

7　本書で表記する色調は、農林水産省水産技術会事務局及び財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(2002 年版) に準拠した。

8　発掘調査及び本書の作成に際して、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。(順不同・敬称略)
津村　善博・間渕　創（三重県総合博物館）、大川　操（三重県埋蔵文化財センター）

10　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、四日市市教育委員会が保管している。

Ⅰ　調査に至る経緯と公開

1．調査に至る経緯

上野遺跡は、四日市市大字西阿倉川字上野に所在する。遺跡内では過去に開発に伴って平成元(1989)年度に第 1 次調査、平成 2 (1990)年度に第 2 次調査を実施しており、共に弥生時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されている。今回行った第 3 次調査は、東洋地所株式会社の宅地造成工事に伴う事前調査として実施した。

開発計画地は、平成 27 年に埋蔵文化財の照会があり、上野遺跡の範囲内であったため、四日市市教育委員会と東洋地所との間で埋蔵文化財の保護措置が協議されることとなった。協議の結果、平成 28 年 6 月 2 日に試掘調査を行い、調査では遺構・遺物が確認された。その結果を受けて再度協議の結果、開発計画地のうち造成による切土が行われる部分について発掘調査を行うこととなり、平成 28 年 12 月 1 日より調査を行った。

2．文化財保護法等にかかる諸手続き

文化財保護法に係る諸手続きは、以下により行っている。

【法 93 条】平成 28 年 5 月 9 日付、社会第 66 号

【法 93 条 2】平成 28 年 6 月 2 日付、(県教育長通知) 社会第 66 号－2（事業者宛）

【試掘調査】

・協定書・協議書締結　平成 28 年 6 月 2 日（東洋地所株式会社　代表取締役　中林秀男・四日市市教育長　葛西文雄）

・調査実施　平成 28 年 6 月 20 日

・結果報告　平成 28 年 6 月 21 日付、社会第 66 号－3（事業者・県教育長宛）

【法 99 条】

平成 28 年 12 月 1 日付け、社会第 66 号－4（県教育長宛）

【発掘調査】

・協定書・協議書締結　平成 28 年 11 月 28 日（東洋地所株式会社　代表取締役　中林秀男・四日市市教育長　葛西文雄）

・結果報告　平成 29 年 3 月 29 日付、社会第 66 号－5（事業者・県教育長宛）

・発見届　平成 29 年 4 月 3 日付、社会第 66 号－6（四日市北警察署長宛）

・埋蔵文化財認定　平成 29 年 4 月 17 日付、教委第 12－4503 号（県教育長通知）

・譲与申請　平成 29 年 10 月 13 日付、社会第 61 号－2（県教育長宛）

3．公開

平成 29 年 1 月 14 日に現地説明会を実施した。見学者 150 名。

4．協力依頼

金属製品の応急的保存措置を実施するために、三重県埋蔵文化財センターに支援を依頼した。

・平成 29 年 3 月 3 日付、社会第 387 号（市教育長依頼、三重県埋蔵文化財センター所長宛）

・平成 29 年 3 月 3 日付、教埋第 396 号（県埋蔵文化財センター所長回答、市教育長宛）

併せて、保存措置の前後には、資料の状態を観察および記録するために三重県総合博物館に調査協力を依頼した。

・平成 29 年 3 月 1 日付、社会第 375 号（市教育長依頼、三重県総合博物館館長宛）

・平成 29 年 4 月 10 日付、社会第 14 号（市教育長依頼、三重県総合博物館館長宛）

（伊藤・川崎）

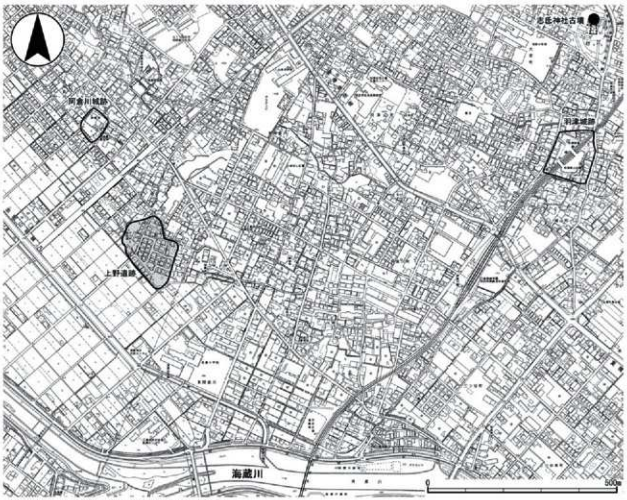
Ⅱ　位置と環境

1．地理的環境

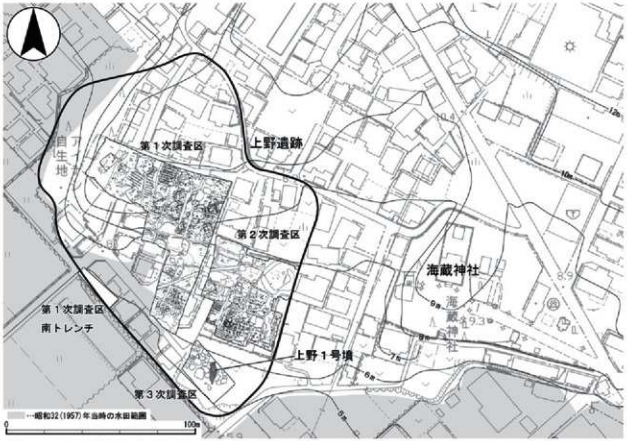
四日市市は、南北に長い三重県の北部に位置し、西は鈴鹿山脈によって限られ、東は伊勢湾に面する。市域を流れる河川は、鈴鹿山脈に源を発し、東流して伊勢湾に注ぐ。これらの河川間には東西方向に丘陵や台地が延び、その上には多くの遺跡が確認されている。

市内では、東部の海岸平野を東海道が南北に通っ

第１図　遺跡位置図（1:50,000）〔国土地理院 1:25,000 桑名・菰野・四日市東部・四日市西部〕



第２図　上野遺跡周辺地形図（1:10,000）



第３図　上野遺跡第３次調査区位置図（1:2,000）

ている。途中の日永追分で参宮道は分岐し、伊勢神宮へ向かう。伊勢湾に面する湊からは、対岸の三河や美濃に通じ、太平洋に出て東国とも交易が行われた。鈴鹿山脈の八風越えや千種越えによって、近江を通る東山道と繋がり、京と東国を結ぶ交通の要衝となっている。

上野遺跡は、四日市市東部の西阿倉川に所在し、海蔵川左岸に広がる阿倉川台地南辺部に立地する。

2．歴史的環境

上野遺跡（1）とその周辺の歴史的な経過を通観する。文章中の番号は第1図の番号に対応している。

旧石器時代

四日市市周辺では、ナイフ型石器の出土する遺跡がいくつか知られている。内部川・鎌谷川流域に属する内戸谷B遺跡や宮蔵遺跡などの市域南部のグループと、朝明川流域の久留倍遺跡（2）及び、野呂田遺跡などを含む市域北部のグループである。上野遺跡のある阿倉川丘陵周辺では当該期の遺跡は確認されていない。

縄文時代

縄文時代草創期に属するものとしては東北山A遺跡など、有舌尖頭器が出土した遺跡が鈴鹿山麓扇状地の台地上で多数確認されている。　早期の遺跡は、中野山遺跡（3）で縄文早期の煙道付炉穴が多数検出されたほか、内部川流域の一色山遺跡で押型文土器が出土している。このほかに発掘調査で遺構が確認されている例を挙げると、東日野遺跡（4）や小牧南遺跡で竪穴住居が、西ヶ広遺跡（5）で縄文中期後葉の土坑とその中から深鉢が、志知南浦遺跡（6）のような沖積地で縄文晩期の突帯文土器が、伊坂遺跡（7）で狩猟用の陥し穴が検出されており、徐々にではあるが様相も明らかになりつつある。

弥生時代

弥生時代になると、まず前期に海蔵川と三滝川に挟まれた生桑丘陵上に、いずれも多重環濠をもつ大谷遺跡（8）、永井遺跡（9）などの集落が営まれる。中期から後期では大谷遺跡、永井遺跡も継続して営まれるが、その他の地域でも遺跡数が飛躍的に増加し、海岸部から内陸部に広く分布するようになる。

久留倍遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居のほか、方形周溝墓が確認され、流路からは多くの土器・木製品が出土した。特に後期になると遺構数が飛躍的に増加する。同時期、久留倍遺跡南西の丘陵上に立地する山奥遺跡(10)で大規模な集落が営まれる。土製模造鏡や多数の鉄製品などの遺物がある。このほか中野山遺跡でも集落が確認されている。菟上遺跡(11)では中期後葉に大規模な集落が形成されるが、後期になると一つ谷を隔てた西側の西ヶ広遺跡が中心的集落となる。一方で東側の丘陵頂部に営まれた金塚遺跡（12）では環濠を持つ高地性集落が営まれ、山村遺跡（13）でも環濠が確認されている。低地部では、辻子遺跡（14）で中期後葉から後期の集落及び水田が確認されている。墓域としては、久留倍遺跡及びこれに隣接する大矢知山畑遺跡（15）で方形周溝墓が検出されたほか、山村遺跡でも方形周溝墓が20基検出されている。他に菟上遺跡や広永城跡(16)、問ノ田遺跡(17)でも方形周溝墓が確認されている。この他、金塚遺跡では綾杉文を有する銅鐸破片が、伊坂遺跡では江戸時代に扁平鈕式袈裟襷文銅鐸が出土している。上野遺跡では中期後葉の集落跡と方形周溝墓が確認されている。

古墳時代

古墳時代前期に入ると、久留倍遺跡や上野遺跡でまとまった集落が見られるようになる。また、海岸に近い茂福城跡(52)の下層で確認された里之内遺跡(18)ではS字状口縁台付甕が出土しており、この時期に海岸低地への進出が始まったものと見られる。一方でやや内陸の横谷遺跡(36)でも小規模な集落が確認されている。周辺の前期古墳は、内行花文鏡や車輪石・勾玉などが出土した志氏神社古墳(19)があるほか、員弁川水系では桑名市の高塚山古墳が見られる程度である。菟上遺跡では滑石製合子型石製品の蓋が出土し、伊坂遺跡では勾玉や管玉が出土していることから、他にも消滅した古墳が存在した可能性がある。中期古墳としては、方墳を主体とする広古墳群(20)や、その東側にあって同じく方墳の可能性が指摘されている浄ヶ坊古墳群(21)がある。後期に入ると、遺跡数が爆発的に増加する。中野山遺跡では前期から続いて集落が営まれる。垂坂丘陵東部地域では、一旦断絶していた山奥遺跡で再び集落が営まれるようになる。海蔵川流域では、江田川遺跡(37)のほか、川向山添遺跡（38）で後期の集落が確認されている。古墳は、特に7世紀以降に小規模な群集墳が多く築造される。筆ヶ崎古墳群(22)や八幡古墳(23)、御池古墳群のように横穴式石室を主体とする古墳がある一方、死人谷横穴墓群(24)や金塚横穴墓群(25)、　広永横穴墓群(26)のように横穴墓も多数見られ、その導入の背景が注目される。北山C遺跡(27)では多数の方墳からなる大規模な群集墳が確認されている。このほか、所属時期は明確ではないが、鈴木敏雄氏の記録によれば御池古墳群東側の丘陵上に「大塚」と称される前方後円墳が1基存在したことが伝えられる。生産遺跡としては垂坂丘陵や朝日丘陵周辺に、まず5世紀後半に小杉大谷窯跡（29）が築かれ、その後、伊坂窯跡(30)、西ヶ谷古窯跡(31)、垂坂古窯跡(32)、鳩浦古窯跡(33)など古墳時代中期から奈良時代にかけて須恵器窯が築かれた。西ヶ谷古窯跡に隣接する西ヶ谷遺跡(34)は、その生産活動に関わっていた集落と考えられる。土師器焼成坑については、山奥遺跡や西ヶ谷遺跡、落河原遺跡、久留倍遺跡で確認されている。

飛鳥～奈良時代

上野遺跡の所在する西阿倉川地区は、古代三重郡の北辺に位置している。周辺の当該期の主要遺跡は、貝野遺跡（39）、落河原遺跡などがある。特に貝野遺跡では、やや整然さを欠くが、古代の掘立柱建物が多数検出されているほか、暗文土師器がまとまって出土しており、貝野遺跡を含む古代刑部郷の中心的な集落であったと考えられる。落河原遺跡では石帯が出土しており、官人の存在をうかがわせる。近隣の朝明川流域では、古代朝明郡に関わると思われる発掘調査成果も近年相次いでおり、今後の研究に大きな期待が持たれる。久留倍遺跡では東向きの正殿や八脚門等政庁の施設、大規模な東西棟の掘立柱建物等が検出された。また溝で方形に区画された内側に整然と並ぶ総柱建物が確認され、朝明郡の正倉院跡と推測されている。一方、西ヶ広遺跡で確認された、奈良時代に計画的に配置された大型の掘立柱建物群は、官衙に関連する可能性が高い建物群である。谷を隔てた丘陵上に広がる菟上遺跡では、西ヶ広遺跡より古い掘立柱建物群が見つかっている。このほか、宮の西遺跡(40)は石帯のほか木簡が出土し、その内容から古代柴田郷の一部であることが知られる。石帯は、落河原遺跡や前山遺跡(41)でも出土している。対して、山村遺跡、貝野遺跡などはこの時期の一般的な集落と思われる遺跡である。中野山遺跡や筆ヶ崎遺跡(42)の周辺では、多くの建物跡が見つかり、筆ヶ崎遺跡では鉄器加工に関係する遺構や遺物が検出されていることから、当地の古代郷名である大鍋郷との関係が考えられている。

古代三重郡で確認されている古代の寺院としては、智積町の智積廃寺がある。さらに広域に目を向けると、塔心礎から唐三彩の蓋をもつ舎利容器が出土した朝日町の縄生廃寺(43)があり、また桑名市の額田廃寺(44)では飛鳥川原寺と同笵の軒丸瓦が出土している。西ヶ谷遺跡ではまとまった量の瓦が出土し、伊坂遺跡では瓦窯の存在が想定されている。上野遺跡でも搬入品と見られるが、古代の布目瓦が少量出土している。

平安時代

平安前期には久留倍遺跡で引き続き正倉が建てられている。近接する大矢知山畑遺跡は豊富な緑釉陶器などの出土遺物から有力者の居館か寺院関連の遺跡とみられる。当時、当地域に大きな影響を及ぼしたと思われるのは、10世紀前葉に建立され現在も信仰を集める垂坂山観音寺(45)で、同寺の伝承では大膳寺跡(46)もその末寺と伝わる。大膳寺跡の発掘調査では土馬や大量の瓦が出土しているが、遺物の時期は観音寺建立より古い。この近隣にある大谷瓦窯跡(47)は、大膳寺へ瓦を供給した瓦窯である。上野遺跡では人名と思われる「實平」と墨書がある灰釉陶器が多数出土しており、注目される。

中世

律令的支配体制の崩壊に伴い、北勢地方の員弁郡・三重郡・朝明郡の三郡は相次いで伊勢神宮に寄進されて神郡となり、神宮の荘園である御厨・御薗・納所がたてられた。これらの荘園と関わりがあると考えられる遺跡としては、宮ノ西遺跡がある。これは古代から続く遺跡で、墨書土器をはじめとする中世の遺物も豊富に出土しており、近隣の芝田遺

跡(48)・小判田遺跡(49) などとともに当地周辺の有力な集落の一部と考えられる。辻子遺跡は、多数の墨書土器や灰釉陶器などの出土遺物から、古代末期に朝明郡が神宮に寄進された後にこの周辺に所在した弘永御厨の中心域と推定されている。久留倍遺跡では中世の遺構・遺物も多く、掘立柱建物、井戸、溝、区画溝を伴う塚墓、火葬墓等を確認した。菟上遺跡では中世前期の集落と中世後期の大火葬墓群が見つかった。上野遺跡は区画溝と掘立柱建物が確認され、貴重な中世の集落資料となっている。城館について見ると、本遺跡周辺には羽津城跡(50)、阿倉川城跡(51)があるが、後者は明確な遺構が確認できない。ほかに坂部城跡 (52) がある。平野部に目を向けると茂福城跡(53)、浜田城跡 (54)、赤堀城跡 (55) がある。これらは地割や現存遺構から縄張りの復元が試みられており、赤堀城跡は現在までに5次の発掘調査が行われ、土塁などの遺構が検出されている。朝明川流域では大矢知城跡(56)、萱生城跡(57)、伊坂城跡(58)などが見られ、伊坂城跡は近年の発掘調査で防御性の高い縄張りや礎石を有する巨大な櫓門が検出され、16 世紀代の当地域における城づくりの最高到達点と評価されている。

(山本)

【参考文献】

●四日市市

『四日市市史　第一巻　史料編　自然』1990

『四日市市史　第二巻　史料編　考古Ⅰ』1988

『四日市市史　第三巻　史料編　考古Ⅱ』1993

『四日市市史　第七巻　史料編　古代・中世』1991

●四日市市教育委員会

『大谷遺跡発掘調査報告－A地区、B地区－』1966

『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ－C地区の遺構－』1976

『大谷遺跡発掘調査報告Ⅲ－C地区の遺物－』1977

『北山遺跡試掘調査概要』1975

『西ヶ広遺跡発掘調査報告－D地区－』1972

『永井遺跡発掘調査報告』1973

『四日市の後期古墳』1973

『大鐘寺跡』1978・1979・1980・1981・1982

『西ヶ谷遺跡3』2002、『西ヶ谷遺跡4』2002、『西ヶ谷遺跡5』2005

『大矢知山畑遺跡』2002

『山奥遺跡Ⅰ』2003、『山奥遺跡Ⅱ』2004

『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』2006

『久留倍遺跡　5』2013

『久留倍遺跡　6』2013

『川原宮遺跡』2015

『江田川遺跡』2016

『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報　ⅩⅡ』2017

『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報　ⅩⅢ』2018

●四日市市遺跡調査会

『上野遺跡』1991、『上野遺跡2』1992

『西ヶ谷遺跡』1996

●朝日町教育委員会

『萱生廃寺跡発掘調査報告』1988

●朝日町

『みえあさひ文化財マップ』1999

●三重県文化財課

『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970

●三重県埋蔵文化財センター

『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』2002

『研究紀要』第13号2003

『伊坂城跡発掘調査報告』2003

『伊坂遺跡発掘調査報告』2004

『山村遺跡(第2次)発掘調査報告』2004

『辻子遺跡発掘調査報告』2004

『関ノ田遺跡・辻子遺跡(第4次)発掘調査報告』2005

『菟上遺跡発掘調査報告』2005

『広永横穴墓群・広永1号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』2006

『西ヶ広遺跡(第3・4次)発掘調査報告』2006

『志知南遺跡発掘調査報告』2008

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』2015

『新名神高速道路建設事業に伴う神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014

『中野山遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』2016

Ⅲ　調査の成果～遺構～

1．古墳時代後期の遺構

上野1号墳（第5～9図）

調査区中央や北よりの位置で検出した横穴式石室を有する古墳であるが、調査前に墳丘は全く現存しておらず、事前にその存在は把握していなかったものである。平成元年の第1次調査より前には、台地上に高まりが見られたとする情報や、調査地周辺の地形などから、付近には他にも墳丘が滅失した古墳の存在が想定されるため、それらを含めて一連の古墳群ととらえ、「上野古墳群1号墳」と命名した(以下、「上野1号墳」とする)。

遺構は、横穴式石室とその墓坑、それに続く墓道と石材抜き取り穴がある。石室は中心軸を N4° E とし、南に開口する。側壁石材のうち、原位置をとどめているのは玄室東壁1段目の5個のみである。

玄室南端付近で検出された大型石材は、抜き取り穴中にあることから、この位置に元々あったものではなく、本来は立柱石か羨道付近の天井石であったと考えられる。掘り出したものの、何らかの事情で搬出されずに放置されたのであろう。羨道入り口東壁付近に小型の石材1個が残存しており、実測も行ったが床面から浮いた状態であったため原位置のものではないと考えられる。

石室使用石材は全て砂岩であり[2]、上記石材のほかに盗掘時に破砕された石材の一部と見られる同質の砂岩片も古墳周辺から多数出土した。

石室の掘方は幅 3.6m 以上、長さは 8.5m 以上と推定される。

玄室は、西側の抜き取り穴の状況と残存する東壁及び礫敷の範囲などから考えて、全長 4.2m 程度、中央部幅が 1.8m 程度で緩やかな胴張り形となり、西側に袖をつくる片袖式であると見られる。床面には厚さ3～15cm 程度の堅く締まった礫敷があり、石室中央部ではさらにその上に拳大程度の敷石が約1m四方の広さで認められた。敷石の西端付近には、約 15cm 四方で厚さ 5cm 程の板状石材1個があり、棺台の可能性がある。出土遺物のうち、ある程度原型をとどめた須恵器は敷石の上面に相当するレベルで検出されたが、多くは盗掘により原位置から移動している可能性が高い。

羨道部は、幅が不明であるが掘方の形状などから、長さは 2.2～2.5m 程度であろう。羨道の南側には素掘りの墓道が接続する。この墓道南端から玄室部掘方北端までの長さは 11.5m である。

古墳に伴う出土遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、玉類があり、混入遺物として弥生土器、陶器がある。

2．中世後期の遺構

土坑

SK2（第4図）　調査区北部で検出した土坑である。長径 1.7m 以上、短径 0.8m の楕円形と見られる。東半は削平されている。底面はほぼ平坦で、深さは 0.1m 程度である。主な遺物として土師器、陶器がある。

SK4（第4図）　調査区北部で検出した土坑である。東西 4.8m 以上、南北短径 0.8m の略方形と見られる。東半は削平されている。底面は北東に向かって下がっており、深さは 0.2m 程度である。東端に SE20 が重複するが、前後関係は不明である。主な遺物として土師器、陶器があるほか、須恵器の混入も見られる。

SK5（第11図）　調査区北部中央付近の南方に傾斜する緩斜面で検出した土坑である。東西 4.2m、南北 3.4m の略方形である。底面はほぼ平坦で、深さは 0.4m 程度である。主な遺物として土師器　陶器、砥石があるほか、須恵器の混入も見られる。銅製吊手付茶釜 (66) は、中央付近で出土した。この付近では他に十数センチ角程度の砂岩石材も多数出土した。いずれも破片で全体形状は不明ながら、研磨痕やノミによる加工痕が見られることから、石造物もしくは大型砥石の一部である可能性がある。

SK6・7（第4・10図）　調査区中央東壁際で検出した土坑である。東西 2.4m 以上、南北 4.2m の楕円形である。掘削開始時点では東西に2つ土坑が並んでいるものと考えていたが、断面観察により同一土坑であると判断した。土層断面から、本来は側壁が著

しくオーバーハングし、袋状の断面形態をなしていたことが分かる。底面はほぼ平坦で、深さは 0.9m 程度である。主な遺物として土師器、陶器がある。

SK10（第 13 図）　調査区中央部付近で検出した土坑である。東西 2.9m、南北 2.1m の不整形である。底面はほぼ平坦で、深さは 0.4m 程度である。主な遺物として土師器、陶器がある。

SK11（第 13 図）　調査区中央部付近で検出した土坑である。東西 4.0m、南北 2.9m の不整形である。底面はやや凹凸があり、最深部で深さは 0.4m 程度である。主な遺物として土師器、須恵器、陶器がある。

SK12（第 12・13 図）　調査区中央部付近で検出した土坑である。東西 1.1m、南北 1.9m の不整形である。底面は平坦で深さは 0.3m である。遺物はごく少量の土師器が出土している。

SK14（第 14 図）　調査区南部で検出した土坑である。東西長軸 4.3m、南北幅 2.2m、深さ 0.7m で、長方形土坑の短辺に下り口と思われる突出部が付く平面プランである。底面は平坦で、側壁は垂直ないし若干オーバーハングする。遺物は、土師器、須恵器、陶器、土製丸玉がある。後述する SK17 と SK19 も位置が近接して構築された類似の形態をもつ遺構であるが、性格は不明である。

SK15（第 12・13 図）　調査区中央部付近で検出した土坑である。東西 2.9m、南北 2.8m の略円形である。底面は平坦で深さは 0.6m である。遺物は、土師器、須恵器、陶器が出土している。

SK16（第 10・14 図）　調査区南部で検出した土坑である。東西 2.1m 以上、南北 2.0m である。東側は調査区外へと延びている。底面は平坦で深さは 0.7m である。遺物は、土師器、陶器が出土している。

SK17（第 14 図）　調査区南部で検出した土坑である。東西 3.1m 以上、南北 2.6m の方形である。底面は平坦で深さは 0.8m である。遺物は、土師器、須恵器、陶器、焼土塊が出土している。

SK18（第 14 図）　調査区南部の SK16 と SK17 の間で検出した土坑である。東西 2.5m、南北 1.4m の不整形である。底面は平坦で深さは 1.0m である。出土遺物はない。

SK19（第 14 図）　調査区南部の SK14 と SK17 の間で検出した土坑である。東西 2.4m、南北 2.3m の方形である。底面は平坦で深さは 1.0m である。出土遺物は土師器がある。

SK21（第 12・13 図）　調査区中央部西寄りで検出した略方形土坑である。東西 4.9m、南北 5.4m である。底面はやや凹凸があり、深さは 0.7m である。土層断面から、複数の土坑が重複しているものと考えられる。出土遺物は土師器がある。

溝

SD9（第 4 図）上野 1 号墳の玄室南端付近を東西に横切る溝である。幅 0.6m、長さ 2.7m で、古墳の掘削に伴って消滅した。出土遺物は土師器がある。

SD13（第 14 図）　調査区南部の SK16、SK18、SK17 の上に重複する溝である。幅 1.8～0.7m、長さ 5.2m 以上、深さ 0.3m で、S 字状に蛇行している。出土遺物は土師器、土錘、和鏡（310）がある。和鏡は 12 世紀末から 13 世紀初頭のもので、遺構の時期は土師器から中世後期以降と考えられることから、この溝に本来伴う遺物ではない。

井戸

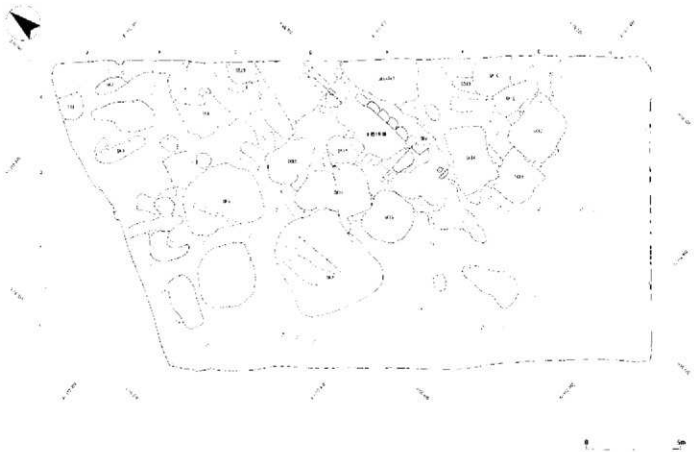
SE20（第 4・10 図）　調査区北部壁際で検出した井戸である。南北 1.6m、東西 1.1m 以上、深さ 2.8m の素掘り円形井戸で、底部径は 0.9m である。底部からは若干の植物片が出土したが、曲物などは設置されていなかった。最下層には多量の礫が見られ、これに多くの遺物が包含されていた。出土遺物は土師器、須恵器、陶器、石仏のほか、何らかの石造物の一部と見られる加工痕を有する砂岩や花崗岩の石材がある。出土遺物から、埋没年代は 16 世紀後半と推定される。

（山本）

【註】

① 四日市遺跡調査会『上野遺跡』1991　3 頁

② 三重県総合博物館の津村善博氏によると、上野 1 号墳周辺において砂岩は古墳南側を流れる海蔵川の上流域でも産出するが、本古墳の石室に使用された黒い泥岩粒を多く含むものは、当地域では員弁川上流域で産出する 1 億 5 千万年ほど前のものであることから、員弁川流域からの搬入品と考えられるとの所見であった。



第４図　第３次調査区遺構配置図（1:200）

第1表　遺構一覧表

土坑

遺構名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SK1	近世以降	A-1	1.3以上	1.4	0.2	土師器、陶器	
SK2	中世後期	A-1	1.7以上	0.8	0.1	土師器、陶器	東半削平
SK3	近世以降	A-3,B-3	2.8	1.4	0.1	陶器	
SK4	中世後期	B-4,C-4	4.8以上	0.5以上	0.2	土師器、須恵器、陶器	東半削平
SK5	中世後期	B-2,3,C-2,3	4.2	3.4	0.4	土師器、須恵器、陶器、砥石、不明石材	吊手付茶釜出土
SK8	中世後期	E-4	2.4以上	4.2	0.9	土師器	SK7と一体の土坑
SK7	中世後期	E-4	2.4以上	4.2	0.9	土師器、陶器	SK8と一体の土坑
SK10	中世後期	C-3,D-3	2.9	2.1	0.4	土師器、陶器	
SK11	中世後期	D-3,E-3	4.0	2.9	0.4	土師器、須恵器、陶器	
SK12	中世後期	D-3,E-3	1.9	1.1	0.3	土師器	
SK14	中世後期	F-3	4.3	2.2	0.7	土師器、須恵器、陶器、土製丸玉、土錘	長方形土坑下り口付き
SK15	中世後期	E-2,3	2.9	2.8	0.6	土師器、須恵器、陶器	円形土坑
SK16	中世後期	F-4,G-4	2.1以上	2.0	0.7	土師器、陶器	
SK17	中世後期	G-3,4	3.1	2.6	0.8	土師器、須恵器、陶器、焼土塊	方形土坑
SK18	中世後期	F-4,G-4	2.5	1.4	1.0	-	
SK19	中世後期	G-3	2.4	2.3	1.0	土師器	方形土坑
SK21	中世後期	D-1,2,E-1,2	5.4	4.9	0.7	土師器	方形土坑

溝

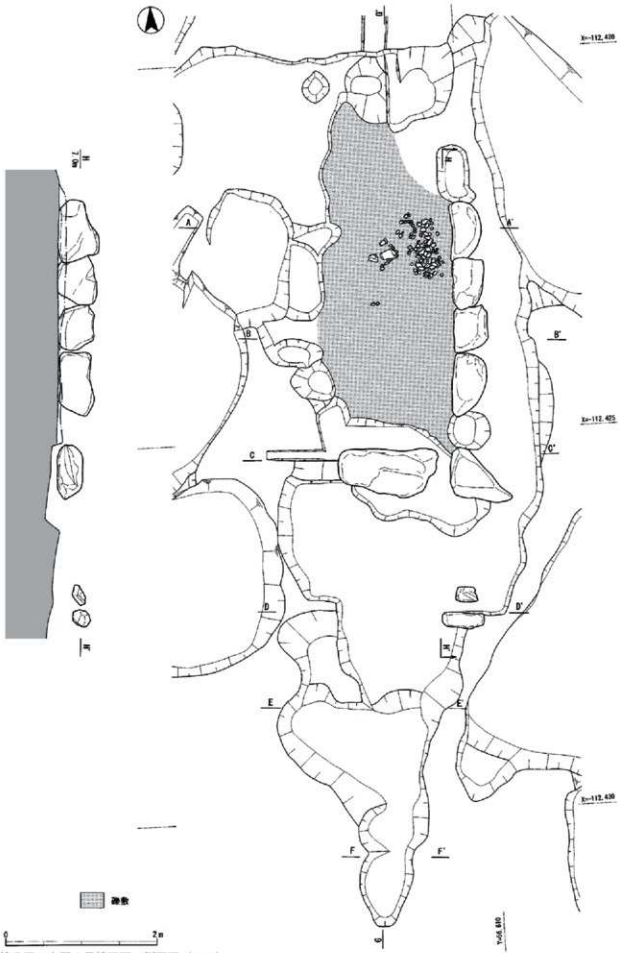
遺構名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SD9	中世後期	E-3,F-3	2.7	0.6	-	土師器	上野1号墳より新
SD13	中世後期以降	F-4,G-4	5.2以上	1.8～0.7	0.3	土師器、土錘、和鏡	SK16、SK17、SK18より新

井戸

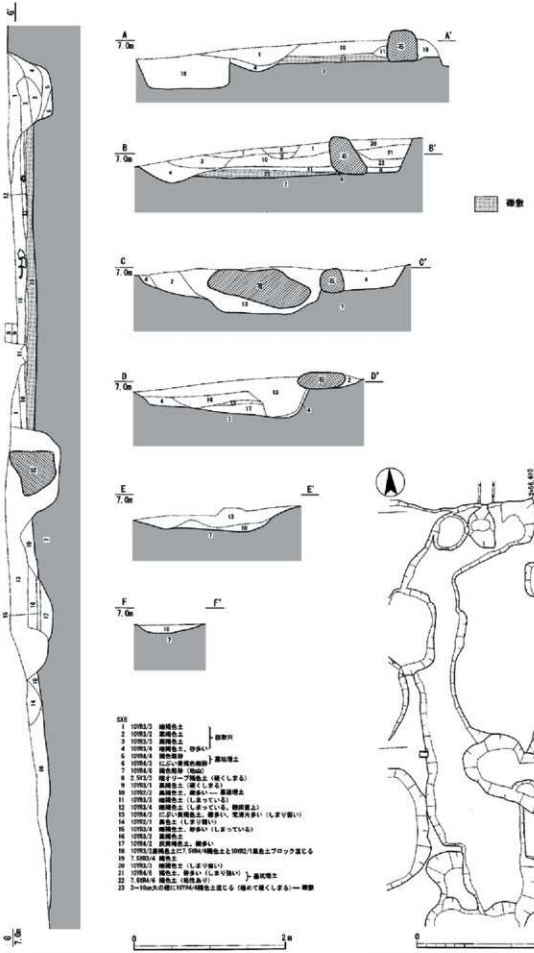
遺構名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SE20	中世後期	C-4	1.1以上	1.6	2.8	土師器、須恵器、陶器、石仏、不明石材	素掘り井戸

墓

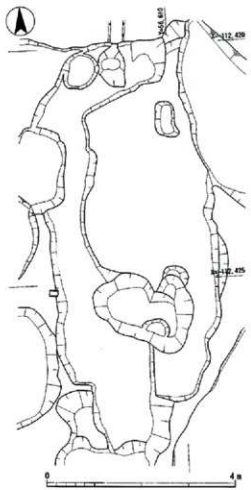
遺構名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
上野1号墳	古墳後期	D-3,4,E-3,4,F-2,3	11.5	3.6以上	0.5	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、瓦、鉄器、玉類	横穴式石室有す 調査時番号SX8



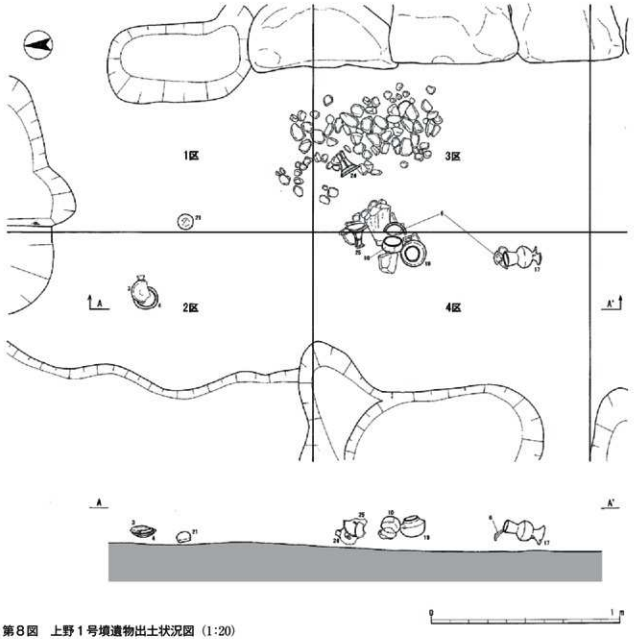
第５図　上野１号墳平面・側面図（1:50）



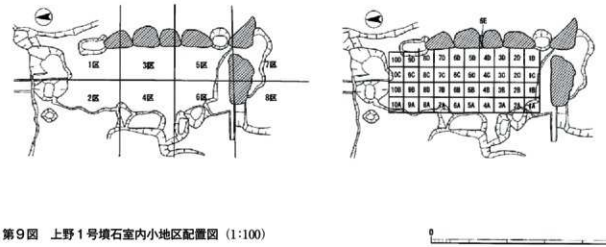
第６図　上野１号墳断面図（1:50）



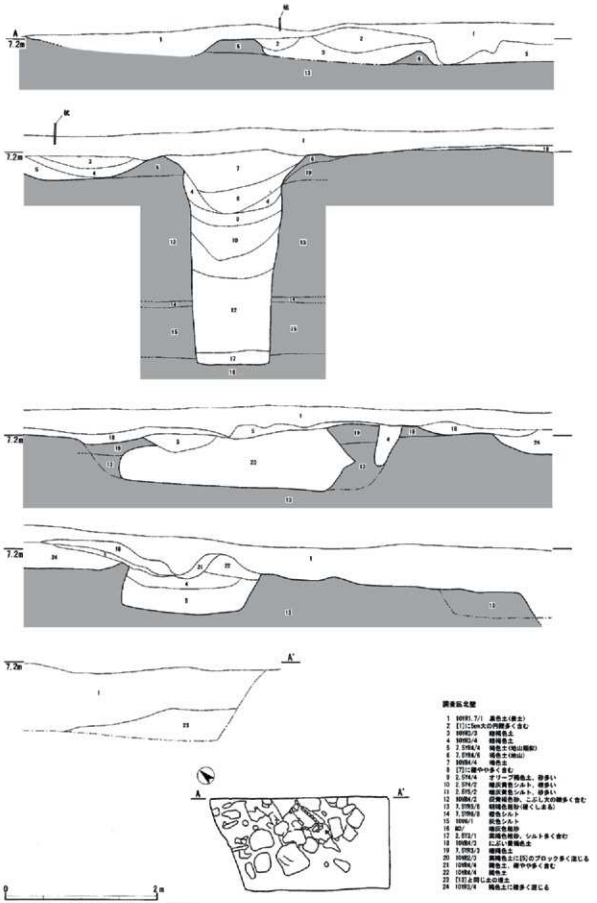
第７図　上野１号墳完掘状況平面図（1:80）



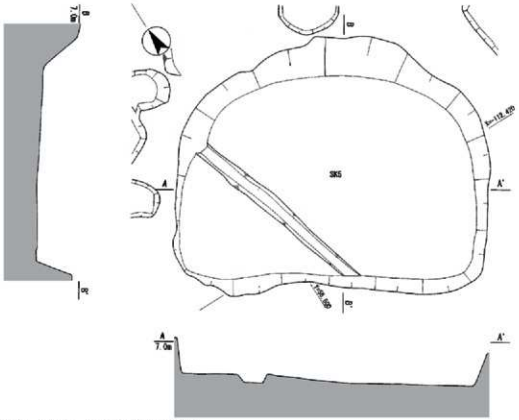
第８図　上野１号墳遺物出土状況図（1:20）



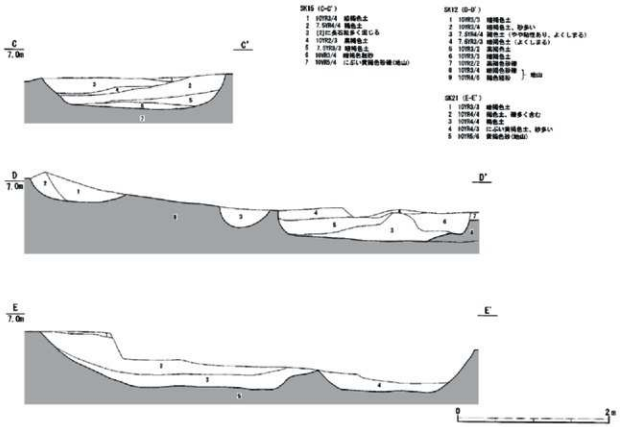
第９図　上野１号墳石室内小地区配置図（1:100）



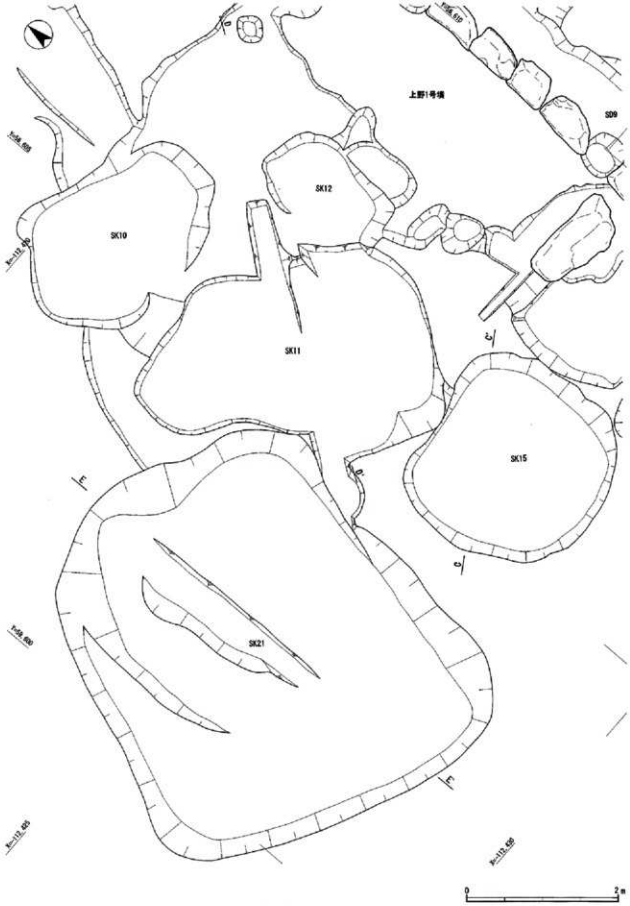
第 10 図　調査区北壁断面図（1:50）



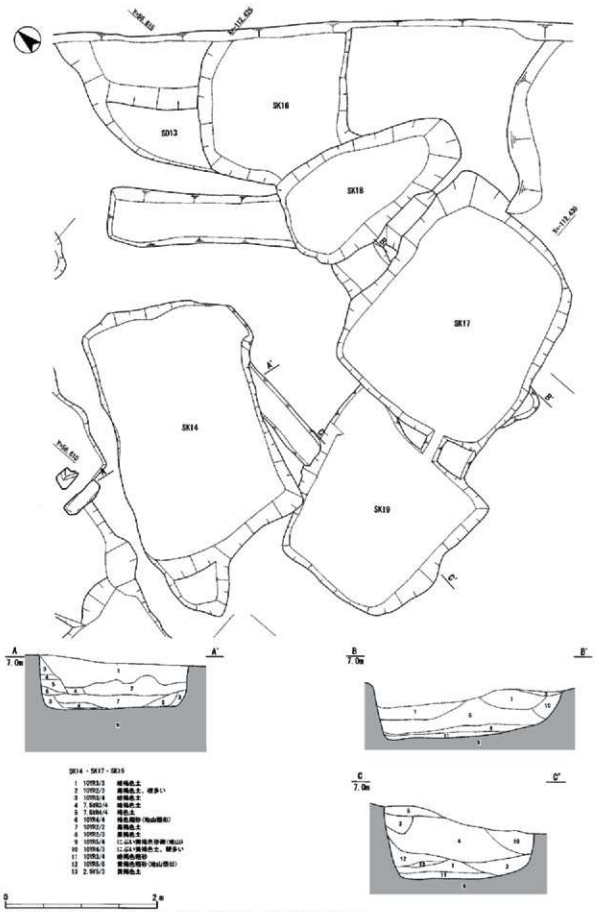
第11図　SK5 平面・断面図（1:50）



第12図　SK12・15・21 土層断面図（1:50）



第13図　SK10・11・12・15・21 平面図（1:50）



第14図　SK14・16・17・18・19 平面・土層断面図（1:50）

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～

1 土器・石製品（第15～18図）

上野1号墳出土遺物（1～56）

上野1号墳の遺物は、古墳本来の副葬品と考えられるもの（1～48）と、石室の盗掘や石材の抜き取りの際に入り込んだと考えられるもの（49～56）がある。

1～3は須恵器杯蓋、4～7は須恵器杯身で、いずれも7世紀前半のものである。これらのうち、3の杯蓋と4の杯身は組み合わされた状態で石室の中央やや奥寄りの床面で出土し、概ね原位置を保っていると考えられる。このため、内部の土も精査したが、微細遺物等は検出されなかった。また、砂粒を多く含む胎土や焼成の甘さ、形態的な特徴は、本古墳の北西約 2.3km に位置する西ケ谷窯の製品に類似するものであり、同窯跡産の可能性がある。

8～10は須恵器盌で、いずれも7世紀前半のものである。8は体部中央に波状文を施すもので、脚が付く可能性がある。9は体部下半にカキメを施す。10は完形で、底面はヘラケズリで仕上げる。10は石室中央部床面で概ね原位置に近いと考えられる状態で出土したが、8と9は玄室を中心に各所に破片が散らばっていた。

11～14は須恵器提瓶である。いずれも7世紀前半のものである。14は横瓶の可能性もある。

15・16は須恵器壺蓋である。15は6世紀後半のもので、玄室奥部で出土した。16は7世紀前半のものである。

17は須恵器台付壺である。壺の体部中央に刺突文を施し、下半はカキメを施す。底部は厚く、内面を工具で押さえて仕上げている。脚部には2方向に長方形のスカシを入れる。石室中央部床面で口を入口方向に向けて倒れた状態で出土した。18は須恵器台付壺脚部である。いずれも7世紀前半のものである。

19～22は須恵器短頸壺である。19は底部が厚く、内面には所々に褐色の付着物が見られる。石室中央部床面で出土した。20は体部にカキメを施す。床面ではないが石室奥部及び SK6 などから破片が出土した。21は内底面を工具によるオサエ、外底面は不定方向のケズリを施す。石室奥部の床面に伏せた状態で出土した。22は石室内各所で破片が出土した。20が6世紀末ないし7世紀初頭と見られるほかは、7世紀前半のものである。

23は須恵器有蓋高坏の蓋で、石室奥部で出土した。6世紀後半のものである。

24～27は須恵器高坏で、いずれも7世紀前半のものである。24は脚部で2段2方向のスカシがある。石室中央部床面で出土した。25は無蓋高坏で、脚部に2段2方向のスカシがある。24と共に石室中央部床面で出土したが、接合する破片は玄室南半部や SK5 などからも出土した。26は脚部で、3方向にスカシがある。墓道内からの出土である。27は脚端部で、24・25とともに出土した。

28は土師器長胴甕で、石室中央部で出土した。外面に少量ススが付着している。

29・30は青色のガラス玉、31～48は滑石製臼玉である。全て石室中央部の床面付近の土砂を水洗して検出した。

49～52は山茶碗。49～51は尾張型3型式[6]、52は渥美型4型式。

53は常滑焼の広口壺で中野晴久氏の編年[7]による第11型式のものである。54は常滑焼の甕で中野8型式のものである。55は土師器鍋である。

56は瓦。にぶい橙色で、外面に斜格子のタタキが入っており、奈良時代頃のものと見られる。同様の瓦は第1次調査で4点報告されており、このうち格子タタキを有するものは1点ある。古代瓦は他にも第2次調査で出土している。

中世の遺構出土遺物

SK4（57）

57は常滑焼の片口鉢で、中野晴久氏の編年による11～12型式のものである。

SK5（58～68）

58は瀬戸美濃産陶器の擂鉢で、大窯3段階後期[8]のものである。59・60は瀬戸美濃産陶器の天目茶碗で、59は大窯2段階のもの、60は古瀬戸後Ⅳ期新段階

のものである。61 は古瀬戸後Ⅳ期古段階の平碗である。62 は見込みに印花文のある陶器丸皿で、大窯2段階頃のものであろう。63 は常滑焼の広口壺で中野編年 12 型式のものである。64～65 は土師器羽釜。66 は土師器茶釜の吊手部で、吊り下げ穴には銅製の吊金具の一部が残っている。吊金具は、厚さ 0.3 ㎜程度の銅板を丸めて管状としたものを環形にしている。67 は土師器皿である。68 は員弁方面で産する頁岩製の砥石である。[①]

SK7 (69)

土師器皿である。

SK10 (70～77)

70 は灰釉陶器の深碗で、折戸 53 号窯型式のものである。71 は常滑焼の片口鉢で中野 11～12 型式のものである。破片の一部は SK5 出土のものと接合した。72 は常滑焼の甕で中野 6 a 型式のもの、73 は常滑焼の広口壺で中野 10 型式のものである。74～76 は土師器羽釜、77 は土師器茶釜である。

SK11(78～83)

78 は陶器鉢で、古瀬戸後Ⅰ期のもの。79・80 は常滑焼の広口壺である。79 が中野 10 型式で、破片の一部は SK10 出土のものと接合した。80 は中野 8b 型式のもので、肩部にスタンプ文がある。81 は常滑焼の甕。中野 9 型式で、破片の一部は SK10 出土のものと接合した。82 は土師器皿である。83 は陶器四耳壺で、古瀬戸前Ⅲ期のものか。

SD13 (84・85)

84 は瀬戸美濃産陶器の擂鉢Ⅱ類で錆釉がかけられている、大窯3ないし4期のもの。85 は土師質の土錘である。

SK14 (86～92)

86 は尾張型3型式の山茶碗で、内面は使用により摩耗している。87 は山皿。底面中央に穴があいているが、意図的な穿孔かは不明。88 は古瀬戸の折縁深皿で後Ⅲ期頃のもの。89 は常滑焼の広口壺で中野 7 型式。90 は常滑焼の甕で中野 10 型式である。91 は土師器皿である。92 は土製丸玉である。

SK15 (93)

古瀬戸の片口鉢Ⅱ類で中Ⅳ期のものである。

SK17 (94～97)

94 は灰釉陶器碗で百代寺窯型式のものである。95・96 は土師器皿である。97 は南伊勢系の土師器鍋である。

SK19 (98・99)

98 は山茶碗で、尾張型 10 型式。使用により若干摩耗している。99 は瀬戸美濃産陶器の天目茶碗で、古瀬戸後Ⅰ期のもの。

SE20 (100～110)

100 は山茶碗で、尾張型5型式。101 は瀬戸美濃産陶器の天目茶碗で鉄釉がかかっている。大窯2期のもの。102 は常滑焼の片口鉢で、中野 11～12 型式のものである。SE20 下層出土の破片と SK4・SK5・SK10 出土の破片が接合した。103 は古瀬戸の花瓶Ⅰ類。104・105 は常滑焼の甕で、104 は中野 9 型式、105 は中野 10 型式のもの。106 は常滑焼の広口壺で下層から出土した。外面に厚く自然釉がかかっており、中野 12 型式のもの。107 は土師器皿で、灯明皿として使用された可能性がある。108・109 は土師器羽釜である。110 は細粒の砂岩で作られた石仏で、下層から礫群とともに3つに割れた状態で出土した。楕円形の自然石の下半を整形して自立するようにし、前面に仏の座像を陽刻する。首から上の破片は現存しないが、前面から首の破断面にかけて煤が付着していることから、埋没時点で欠損していたようである。

SK21 (111)

土師器羽釜である。

包含層 (112～120)

112・114 は常滑焼の甕で中野 10 型式のもの。113 は常滑焼の広口壺で中野 7 型式のもの。115 は常滑製品の陶錘。116 は古瀬戸の折縁中皿で、後Ⅱ期のもの。117 は須恵器の鉢と思われる。118 は円形加工陶片で、にぶい赤褐色の鉄釉がかかっており、恐らく近世以降のものである。119 は凝灰岩製の砥石、120 は砂岩製の砥石である。

(山本)

【註】

① 須恵器については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1980 を参考にした。

② 山茶碗の編年については藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要　第3号』三重県埋蔵文化財センター　1994 を参考にした。

③ 常滑製品は中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社　1995 を参考にした。

④ 瀬戸美濃窯製品は、瀬戸市埋蔵文化財センター『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～ 資料集』1996、瀬戸市埋蔵文化財センター『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　―東アジア的視野から― 資料集』2001　を参考にした。

⑤ 石材の鑑定は、三重県総合博物館 津村善博氏のご教示による。

2. 金属製品（第 21 図）

上野1号墳 (301～308)

鹿角装刀子（301）は、刀身部分の残存長が 16.4 ㎝で、刀先が欠損する。柄部分は刀身が木質で被われ、更に上面に鹿角が薄く残っている。また刀身部分にも、一部で鹿角が残る。刀子切先片（302）、刀子刀身片（303）、刀子茎（304）はいずれも細片である。304 には、柄部分に鹿角が薄く残存する。

305～308 は鉄鏃である。305 は鏃身部の断面形が片丸造の長頸鏃であり、茎部には樹皮による樺巻がわずかに残存する。306 は角関の関部を境として、茎部に樹皮が残存する。307 は鏃身部の断面形が平片刃造の鉄鏃である。308 は鉄鏃頸部片である。

SK21(309)　板状鉄製品は、幅 3.7 ㎝で、両端は欠損している。板状の鉄地を半分に折り曲げて整形されている。

SD13(310)

菊花双鳥鏡（310）は、鏡面径 8.3 ㎝、縁厚 0.5 ㎝、鏡厚 0.1 ㎝、鈕径 0.5 ㎝である。鈕座は花蕊座鈕であり、紐の痕跡が薄く貼りついている。材質は、Cu（銅）46.25%、Sn（スズ）23.08%、Pb（鉛）21.38%、As(ヒ素)8.12%等である(第 21 図参照)。

鏡背面には、円形の鏡面の外縁にそって、右下から左上方に向かって菊花を配置し、左上方の空間に双鳥を配置する。このような文様構成は、12 世紀以降にみられる定型模様とされており、鎌倉時代になると、双鳥は鈕座の左下寄りに定位置を得るとされている。[①] 鏡背面の文様構成からは、本資料は 12 世紀以降の所産であり、なおかつ鎌倉時代に定型化する以前の資料と判断できる。

また、縁厚が 0.5 ㎝である点で、縁厚を分類した久保分類では厚縁鏡（Ⅲ類）に相当する。厚縁鏡（Ⅲ類）は 12 世紀後半から見られ、第4四半期から鎌倉時代にかけて一般的になるとされている。[②]

材質の点では、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての鏡は、銅・錫・鉛・ヒ素および銅・鉛・ヒ素を主成分とする鏡の割合が多いことが指摘されている。[③]

鏡背文様、形態、材質の点からみて、12 世紀末から 13 世紀初頭にかけての平安時代末期から鎌倉時代前期の鏡と捉えられる。

なお、透過X線画像の観察からは、鏡の破断面から双鳥文付近にかけて、肉眼では観察できない亀裂が数多く観察される点や、鈕の上方の腐蝕部分において鏡厚が薄くなっている点が観察される。

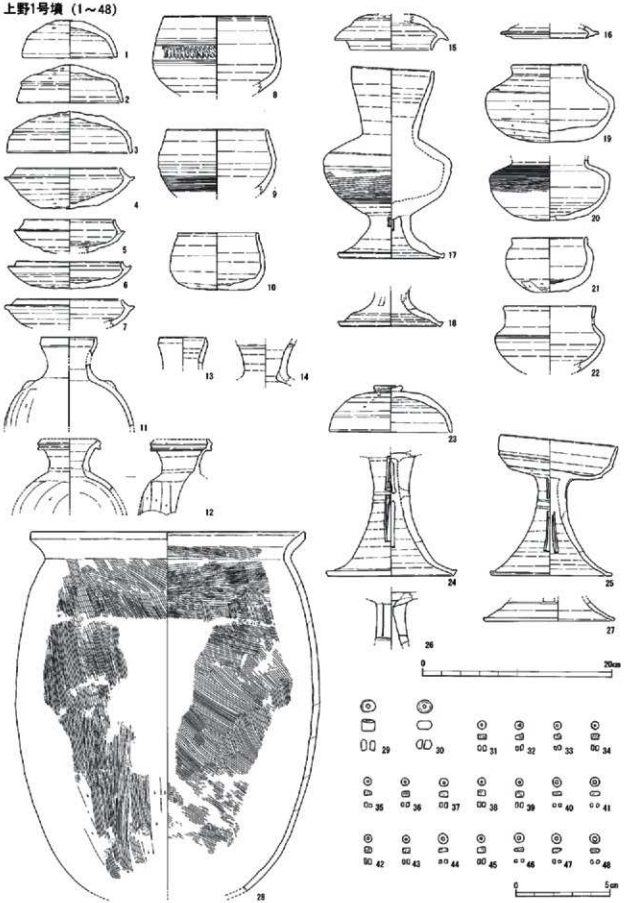
(川崎)

【註】

① 久保智康『日本の美術』No. 394 中世・近世の鏡　至文堂　1999

② 中川あや編『日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵男体山頂遺跡出土鏡の研究』東アジア金属工芸史の研究 17 飛鳥資料館研究図録第 17 冊　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　日光二荒山神社 2014

上野1号墳（1～48）



第15図　遺物実測図①（1：4）（1：2）

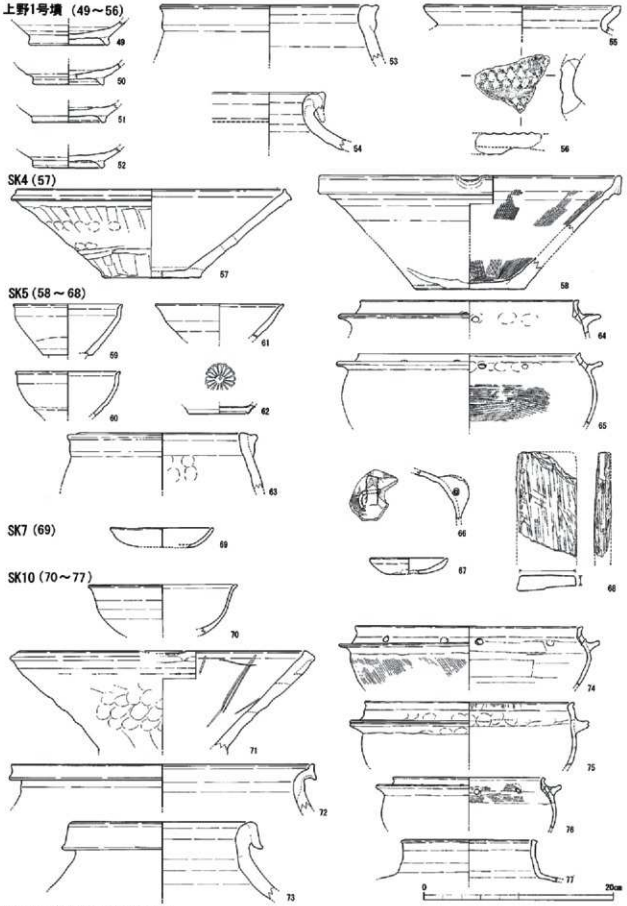
上野1号墳（49～56）

SK4（57）

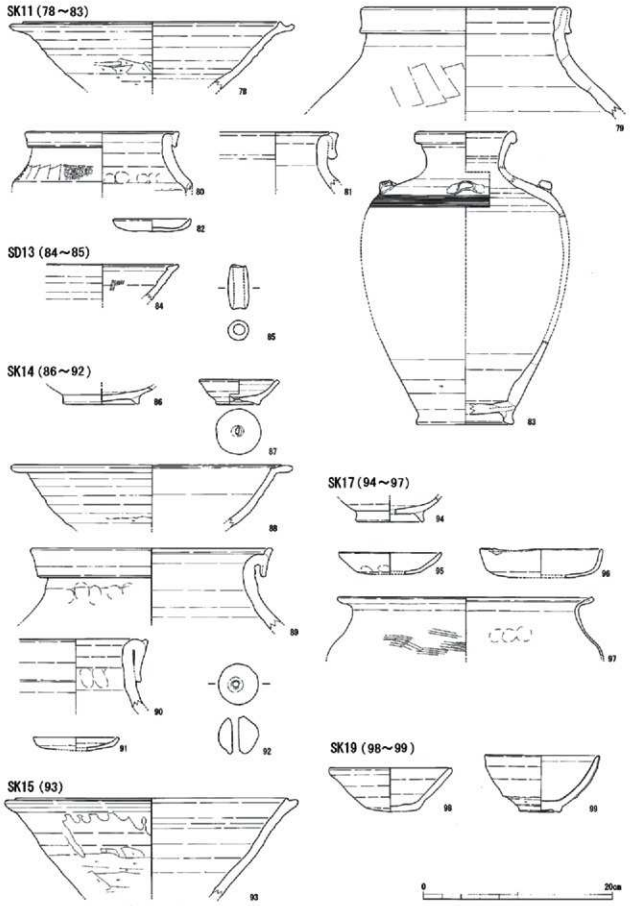
SK5（58～68）

SK7（69）

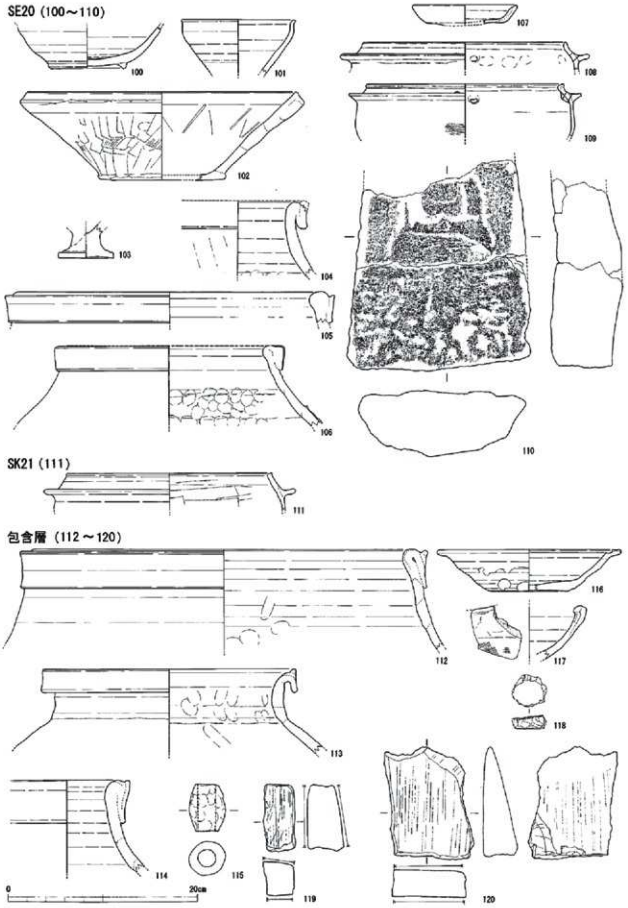
SK10（70～77）



第16図　遺物実測図②（1：4）

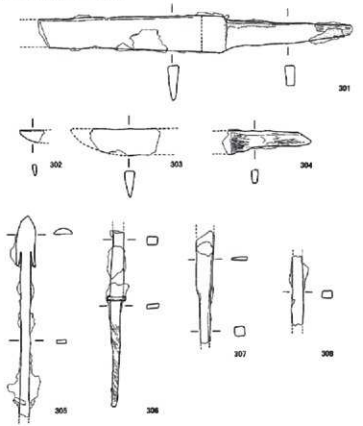


第17図　遺物実測図③（1：4）

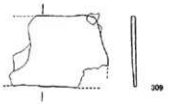


第18図　遺物実測図④（1：4）

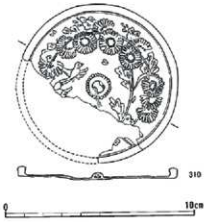
上野1号墳（301～308）



SK21（309）



SD13（310）



第19図　遺物実測図⑤（1：2）

報告番号	実測番号	器種	形状	出土位置	接合有無	備考
301	K3	刀子　鹿角装刀子	残存長16.4cm	SX8(上野1号墳)2区南ベルト床面	接合有	
302	K9	刀子切先片	残存長1.3cm	SX8(上野1号墳)4区トレンチ	接合無	
303	K8	刀子刀身片	残存長3.6cm	SX8(上野1号墳)1区	接合無	
304	K7	刀子茎	残存長4.6cm	SX8(上野1号墳)2区	接合無	柄に鹿角装
305	K4	鉄鏃　長頸鏃	残存長10.5cm	SX8(上野1号墳)4区南ベルト床面	接合有	樹皮残存
306	K5	鉄鏃	残存長9.2cm	SX8(上野1号墳)4区南ベルト床面	接合有	
307	K6	鉄鏃	残存長5.8cm	SX8(上野1号墳)4区南ベルト床面	接合無	
308	K10	鉄鏃頸部片	残存長3.6cm	SX8(上野1号墳)4区トレンチ	接合無	
309	K2	板状鉄製品	幅5.0cm	D1・D2　SK21	接合有	
310	K1	和鏡　菊花双鳥鏡	鏡面径8.3cm	F4　SD13	接合有、4片	

※報告番号は301～
※実測番号はK1～

第2表　金属製品一覧表

3．金属製品の蛍光Ｘ線分析

以下の通り、茶釜持手（66）と菊花双鳥鏡（310）は蛍光X線分析を実施した。分析は三重県総合博物館の調査協力により、実施した。（川﨑）

（1）茶釜持手（66）

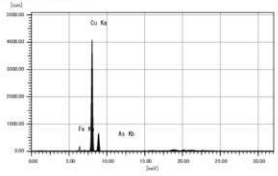
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 4/13 14:02
品名	上野遺跡
品番	茶釜持手
ﾛｯﾄNo.	
ｵﾍﾟﾚｰﾀ	
備考	

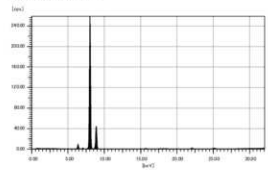
	測定条件1	測定条件2	測定条件3	測定条件4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	38	44	30	30
コリメータ	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm
励起電（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	770
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0 usec	1.0 usec	1.0 usec	1.0 usec

［X線スペクトル］

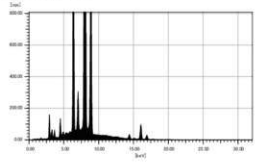
<測定条件 1>



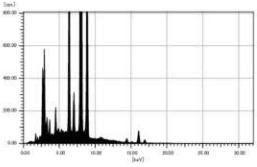
<測定条件 2>



<測定条件 3>



<測定条件 4>



［定量結果］

Fe	3.48(wt%)
Cu	96.49(wt%)
As	0.03(wt%)

［試料像］

第20図　茶釜持手分析結果

（2）菊花双鳥鏡（310）

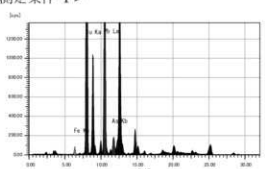
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 4/13 13:42
品名	上野遺跡
品番	銅鏡
ﾛｯﾄNo.	
ｵﾍﾟﾚｰﾀ	
備考	

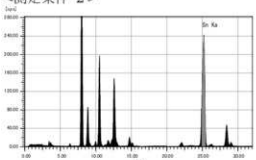
	測定条件 1	測定条件 2	測定条件 3	測定条件 4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	29	42	30	30
コリメータ	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	882	1000	431	313
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0 usec	1.0 usec	1.0 usec	1.0 usec

［X線スペクトル］

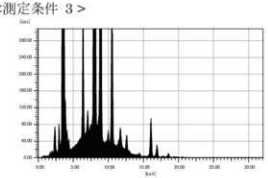
<測定条件 1>



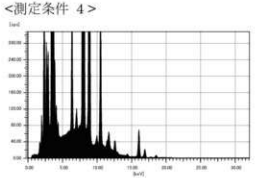
<測定条件 2>



<測定条件 3>



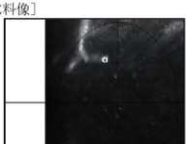
<測定条件 4>



［定量結果］

Fe	1.15(wt%)
Cu	46.25(wt%)
As	8.12(wt%)
Sn	23.08(wt%)
Pb	21.38(wt%)

［試料像］



第 21 図　菊花双鳥鏡分析結果

第３表　遺物観察表①

報告書番号	実測番号	器種	出土位置 出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
1	2-3	須恵器 杯蓋	1区, 3区 SX8	9.8	－	3.9	外-ヘラ切り･ナデ, ロクロケズリ, ロクロナデ 内-ロクロナデ	密	良	灰(N6/0)	70 口60	7C初頭
2	3-7	須恵器 杯蓋	3区 1区 SX8	11.0	－	3.9	外-ロクロケズリ, ロクロナデ 内-ロクロナデ	密(1mの砂粒を少量含む)	やや良	灰白(5Y7/1)	口15	M16～50
3	1-1	須恵器 杯蓋	2区 SX8	12.9	－	4.4	外-ヘラ切り, ロクロケズリ, ロクロナデ 内-ロクロナデ	やや密(0.5～2mの砂粒全体的に含む, 6mの小石3個ほど含む)	やや良	灰(5Y6/1)	95	取上No.1 7C第1四半期 焼イガ変質痕の可能性有
4	1-2	須恵器 杯身	2区 SX8	10.9	－	4.3	外-ロクロケズリ, ロクロケズリ, ヘラ切り 内-ロクロナデ	やや密(0.5～2mの砂粒全体的に含む, 5mの小石2個ほど含む)	やや良	灰白(5Y7/1)	95	取上No.2 7C第1四半期 焼イガ変質痕の可能性有
5	3-4	須恵器 杯身	S4 1区, 2区 SX8	9.4	－	－	外-ロクロケズリ, ロクロケズリ 内-ロクロナデ	密	やや良	灰白(5Y7/1)	口30	M50前
6	1-6	須恵器 杯身	S4 4区 SX8	11.0	8.3	2.9	外-ロクロナデ, ロクロケズリ, 当たり痕 内-ロクロナデ	密(0.5～1mの砂粒全量含む)	良	灰(N5/0)	90 口80	取上No.7, 11 7C初頭
7	4-1	須恵器 杯身	S4 1区, 2区 SX8	11.1	－	－	外-ロクロナデ 内-ロクロナデ	やや密(0.5mの砂粒を全体的に含む)	やや良	灰(5Y6/1)	口20	7C前半第1四半期か
8	3-3	須恵器 壺	S3, E3 1区, 2区, 4区 SX8	11.2	－	－	外-ロクロナデ, 沈線, 波状文 内-ロクロナデ	密	良	灰(7.5Y4/1) 灰(5Y6/1)	口40	7C初頭 内外面に自然釉かかる
9	3-6	須恵器 壺	1区 1区取穴 SX8	10.6	－	－	外-ロクロナデ, 沈線, カキ目, ロクロケズリ 内-ロクロナデ	密(0.5mｰ1mの砂粒少量含む)	良	灰(N6/0) 灰(N6/0)	口10	7C初頭
10	1-5	須恵器 壺	S3 1区 SX8	8.3	8.0	6.1	外-ロクロナデ, ロクロケズリ 内-ロクロナデ, ロクロケズリ	密(0.5～2mの砂粒全体的に含む, 3～6mの小石3個ほど含む)	良	褐灰(10YR5/1)	100	取上No.8 6C後半
11	3-1	須恵器 提瓶	S4 1区 SX8	5.8	－	－	外-ロクロナデ, 沈線, つまみ貼付, ロクロケズリ･カキ目 内-ロクロナデ	やや密(0.5～2mの砂粒全体的に含む)	良	灰(5Y6/1) 褐灰(10YR5/1)	口25	7C第2四半期
12	2-5	須恵器 提瓶	E2, E3 4区 SX8	－	－	－	外-ロクロナデ, ロクロケズリ 内-ロクロナデ, ナデ	密(1mの白い砂粒少量含む)	良	灰(5Y6/1)	口45	7C初頭か
13	4-2	須恵器 提瓶	2区 SX8	4.8	－	－	外-ロクロナデ 内-ロクロナデ	密(0.5mの砂粒全体的に含む)	良	灰白(2.5Y7/1) 黄灰(2.5Y6/1)	口20	7C前半
14	4-4	須恵器 瓶	S3 4区 SX8	頸4.5	－	－	外-沈線, ロクロナデ 内-ロクロナデ	密(1～2mの砂粒少量含む)	良	灰(N4/0) 灰白(5Y7/1)	頸25	7C前半～中頃
15	3-2	須恵器 台付壺蓋	1区 SX8	11.8	8.6	－	外-ロクロケズリ, ロクロナデ 内-ロクロナデ	密(0.5～1mの砂粒少量含む)	良	灰(N5/0) 灰(5Y6/1)	口30	6C後半
16	4-3	須恵器 台付壺蓋	4区 SX8	10.2	7.8	－	外-ロクロナデ 内-ロクロナデ	密(0.5～2mの砂粒少量含む)	良	灰(N6/0) 灰褐(7.5YR5/2)	口20	須恵ｰ末 7C前半第2四半期
17	2-2	須恵器 台付壺	SX8	8.5	10.8	20.0	外-ロクロナデ, 沈線, 刺突文, カキ目, スカシ3方向 内-ロクロナデ	密(0.5～2mの砂粒全体的に含む)	良	灰(N5/0)	85 口45 台60	取上No.10 7C第1四半期 内外面に自然釉かかる
18	5-3	須恵器 台付壺	E3 3区 SX8	－	10.6	－	外-ロクロナデ, スカシ3方向 内-ロクロナデ	密	良	灰白(2.5Y7/1)	底20	7C第1四半期 外面に自然釉かかる
19	2-1	須恵器 短頸壺	SX8	7.5	10.3	8.2	外-ロクロナデ, 沈線, ロクロケズリ 内-ロクロナデ, ロクロナデのちナデ	密(0.5～4mの砂粒全体的に含む)	良	灰(10Y6/1) 灰(10Y5/1)	100	取上No.7 TK207 内面底部に炭色い付着物あり
20	3-6	須恵器 短頸壺	E3(E4) 1区 SX8 (SK6)	－	－	－	外-ロクロナデ, カキ目, ロクロケズリ 内-ロクロナデ	密(0.5～1mの砂粒少量含む)	良	灰(N6/0)	体20	6C後～7C初
21	1-4	須恵器 短頸壺	SX8	7.8	3.6	5.8	外-ロクロナデ, ヘラ切り 内-ロクロナデ, 工具オサエ	密(1～3mの砂粒含む)	良	灰(N5/0)	ほぼ100	取上No.4 7C前半か
22	3-5	須恵器 短頸壺	S4 1区, 2区, 3区 SX8	9.4	－	－	外-ロクロナデ, 沈線, ロクロケズリか 内-ロクロナデ	やや密	良	灰(N4/0) 黄灰(2.5Y7/2)	口5	M50前 内外面に自然釉かかる
23	2-4	須恵器 有蓋高杯蓋	1区 SX8	12.7	－	－	外-つまみ貼付, ロクロケズリ, ロクロナデ 内-ロクロナデ	密(0.5～1mの砂粒少量含む)	良	灰(N6/0) 灰褐 (7.5YR5/2)	口25	6C後第3四半期
24	1-6	須恵器 高杯	SX8	－	13.3	－	外-ロクロナデ, 沈線, スカシ2段・2方向 内-ロクロナデ, ナデ	密(1～3mの砂粒少量含む)	良	灰(N6/0)	脚80 底15	取上No.5 TK209
25	1-7	須恵器 高杯	S4(C3) 3区, 4区 SX8 (SK5)	12.3	12.0	14.4	外-ロクロナデ, ロクロケズリ, 沈線, スカシ2段・2方向(上段スカシ貫通せず) 内-ロクロナデ, ナデ	密(0.5～2mの砂粒全体的に含む)	良	灰(N5/0) 暗灰(N3/0)	杯30 脚70	取上No.6 7C第1四半期 全体的に歪み大
26	4-10	須恵器 高杯	SX8	－	－	－	外-ロクロナデ, スカシ3方向, 沈線 内-ロクロナデ, ナデ	密(0.5～1mの砂粒少量含む)	良	灰(N5/0) 灰白(N7/0)	脚70	7C前葉 内外面に自然釉かかる
27	1-3	須恵器 高杯	SX8	－	13.4	－	外-ロクロナデ, 沈線, スカシ(1方向のみ残る) 内-ロクロナデ	密(1mの砂粒を全体に含む)	良	灰白(5Y7/1)	脚5	取上No.1 TK209 内面に自然釉かかる
28	12-1	土師器 長頸壺	E4 3区, 4区 SX8	推定 28.8	－	－	外-ヨコナデ, タテハケ, タテケズリのちタテハケ 内-ヨコナデ, ヨコハケ, ナナメハケ, ヨコハケのちタテハケ	やや密(1～4mの砂粒を含む)	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	口25	外面にススス付着
29	8-8	ガラス製 小玉	1区 SX8	最大径 0.7	孔径 0.2	厚さ 0.6		－	－	藍青色 透明	完形	重量:0.47g
30	8-10	ガラス製 小玉	1区, 2区 SX8	最大径 0.8	孔径 0.2	厚さ 0.45		－	－	藍青色 透明	完形	重量:0.43g
31	8-4	滑石 臼玉	1区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.25		－	－	灰白(5Y8/1)	完形	重量:0.11g
32	8-5	滑石 臼玉	1区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(2.5Y7/1)	完形	重量:0.08g
33	8-6	滑石 臼玉	1区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.25		－	－	灰白(5Y7/1)	完形	重量:0.06g
34	8-7	滑石 臼玉	1区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(2.5Y8/1)	完形	重量:0.10g
35	8-8	滑石 臼玉	1区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰黄(2.5Y7/2)	完形	重量:0.07g
36	8-11	滑石 臼玉	1区, 2区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(5Y7/1)	完形	重量:0.08g
37	8-12	滑石 臼玉	1区, 2区 SX8	最大径 0.45	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(5Y7/1)	完形	重量:0.13g
38	8-13	滑石 臼玉	1区, 2区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(7.5Y7/1)	完形	重量:0.10g
39	8-14	滑石 臼玉	1区, 2区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(7.5Y8/1)	完形	重量:0.08g
40	8-15	滑石 臼玉	1区 SX8	最大径 0.45	孔径 0.2	厚さ 0.2		－	－	灰(N6/0)	完形	重量:0.08g
41	8-16	滑石 臼玉	4区 SX8	最大径 0.5	孔径 0.2	厚さ 0.2		－	－	灰白(7.5Y7/1)	完形	重量:0.09g
42	8-17	滑石 臼玉	1区 1区取穴 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(7.5Y7/1)	完形	重量:0.09g
43	8-18	滑石 臼玉	1区 SX8	最大径 0.4	孔径 0.1	厚さ 0.3		－	－	灰白(5Y8/1)	完形	重量:0.10g
44	8-19	滑石 臼玉	4区 SX8	最大径 0.5	孔径 0.2	厚さ 0.2		－	－	灰(N6/0)	完形	重量:0.12g

第4表　遺物観察表②

報告書番号	実測番号	器種	出土位置 出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	現存度(%)	備考
45	8-20	須石 白玉	2SE SX8	最大径 6.4	孔径 0.1	厚さ 0.3	-	-	良	灰白 (5YR/1)	完形	重量：0.09g
46	8-21	須石 白玉	4SE SX8	最大径 0.5	孔径 0.2	厚さ 0.2	-	-	良	灰白 (N7/0)	完形	重量：0.09g
47	8-22	須石 白玉	4SE SX8	最大径 0.5	孔径 0.2	厚さ 0.2	-	-	良	灰白 (7.5Y7/1)	完形	重量：0.09g
48	8-23	須石 白玉	4SE SX8	最大径 0.5	孔径 0.2	厚さ 0.2	-	-	良	灰 (N6/0)	完形	重量：0.09g
49	4-5	陶器 山茶碗	7SE SX8	-	8.0	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 ih-ロクロナデ　使用痕あり	やや密 (1mm砂粒少量含む)	良	灰白 (2.5Y8/2)	底55	尾張型第3形式 内面に重ね焼か
50	4-6	陶器 山茶碗	7SE SX8	-	7.0	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 ih-ロクロナデ　使用痕あり	やや密	良	灰白 (2.5Y8/2)	底40	尾張型第3形式
51	4-7	陶器 山茶碗	7SE SX8	-	7.8	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、糸切のちロクロナデ ih-ロクロナデ　使用痕あり	やや密 (5mmの小石1個中に含む)	良	灰白 (2.5Y8/2)	底40	尾張型第3形式
52	4-6	陶器 山茶碗	7SE SX8	-	7.1	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 モミガラ痕あり ih-ロクロナデ　使用痕あり	やや密	良	灰黄 (2.5Y7/2)	底55	諸美型第4型式
53	4-11	陶器 広口壺	F3 SX8	20.6	-	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 ih-ロクロナデ	やや密 (0.5~1mm砂粒含む)	良	灰白 (2.5Y8/2)	底55	尾張型第11型式 内面口縁部に粘土付着
54	4-9	陶器 壺	7SE上層 SX8	-	-	-	ft-ロクロナデ、施釉 ih-ロクロナデ、ナデ	やや密 (1~3mm砂粒を全体的に含む)	良	暗灰黄 (2.5Y5/2)	小片	常滑製品第8型式
55	13-1	土師器 鍋	E2, E3 6SE SX8	20.3	-	-	ft-ヨコナデ ih-ヨコナデ	やや密 (0.5~3mm砂粒含む)	良	浅黄橙 (10YR/8)	C15	外面にススが付着
56	13-2	瓦	6SE SX8	-	-	厚さ 2.2	斜格子目、ナデ	やや密 (0.5~3, 5mm砂粒含む)	良	灰白 (7.5YR7/4)	小片	
57	5-4	陶器 片口鉢	B4 SK4	28.2	10.4	9.4	ft-ロクロナデ、板ナデ、板ナデのち ヨコナデ、指オサエ-ヨコナデ ih-ロクロナデ　使用痕あり	やや密 (1~5mm砂粒・小石含む)	良	灰白 (5YR6/4)	C20	常滑製品第11~12形式
58	6-7	陶器 鍋鉢	B2, C1, C3 SK5	31.6	11.8	-	ft-ロクロナデ、ヘラ状工具アラリ、糸切痕、施釉 ih-ロクロナデ、櫛目（17条/2.8cm）、施釉	やや密	良	浅黄 (2.5Y8/4)	C25 底25	瀬戸美濃窯製品 大窯第3段階後半 内外面に鉄釉、梅炎
59	6-3	陶器 天目茶碗	B2 SK5	11.4	-	-	ft-ロクロナデ、削り出し、施釉 ih-ロクロナデ、施釉	密	良	灰白 (7.5YR8/2)浅黄 (2.5Y8/4)	C10	瀬戸美濃窯製品 大窯第2段階 内外面に鉄釉か、黒釉 (7.5YR3/2)
60	7-1	陶器 天目茶碗	C3 SK5	10.8	-	-	ft-施釉、削り出し ih-施釉	密	良	灰白 (2.5YR8/4) 浅黄橙 (7.5YR8/4)	C10	瀬戸美濃窯製品 古瀬戸後期新段階 内外面に鉄釉か鉄釉、黒釉 (7.5YR3/1)
61	7-2	陶器 平鍋	C3 SK5	13.4	-	-	ft-ロクロナデ、施釉 ih-ロクロナデ、施釉	密	良	灰白 (2.5Y8/2)	C15	瀬戸美濃窯製品 古瀬戸後期古段階 内外面に灰釉、灰白 (7.5Y7/2)
62	7-3	陶器 丸皿	C3 SK5	-	6.2	-	ft-削り出し高台か、糸切トンナ付痕、施釉 ih-施釉、印花文	密	良	灰白 (10YR8/2)	底70	瀬戸美濃窯製品 大窯第1段階 内外面に灰釉、灰白 (7.5Y7/2)
63	6-4	陶器 広口壺	C3 SK5	16.8	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ、指オサエ-ロクロナデ	やや密 (0.5mm砂粒含む)	良	橙灰 (10YR5/1) 灰黄褐 (10YR6/2)	C15	常滑製品第12型式
64	13-5	土師器 羽釜	E3 SK5	22.8 鍔径 27.4	-	-	ft-ヨコナデ、芯孔あり ih-ヨコナデ、指オサエのちヨコナデ	密 (0.5mm砂粒少量含む)	良	浅黄橙 (10YR8/3)	C10	外面にススが付着
65	13-4	土師器 羽釜	C3 SK5	23.4 鍔径 28.2	-	-	ft-ヨコナデ、指オサエのちヨコナデ、板ナデ、鍔貼付、芯孔1箇2孔方向 ih-ヨコナデ、指オサエのちヨコナデ、ヨコナデ-ミガキハケ	密 (1mm砂粒少量含む)	良	橙 (5YR6/6)	C50	外面にススが付着
66	10-1	土師器 茶釜	C3 SK5	-	-	-	ft-ナデ-ハケ、ナデ ih-ナデ、指オサエ-ナデ	やや密 (0.5~3mm砂粒含む)	良	橙 (5YR7/6)	小片	糸り下げ用の通し孔に鍔鍋焼る
67	13-6	土師器 皿	C3 SK5	8.1	-	-	ft-ヨコナデ、ナデ-指オサエ ih-ヨコナデ	密	やや不良	黄灰 (2.5Y6/1) 黄灰 (2.5Y7/1)	45 C50	
68	16-1	石製品 砥石	C3 SK5	手写 10.9以上	ヨコ6.3	厚さ 1.8		-	-	灰白 (N7/0) 明褐灰 (7.5YR7/1)	-	重量：116g 砥石：黒曜
69	13-7	土師器 皿	E4 SK7	10.8	5.2	2.1	ft-指頭 ih-指頭	密	やや良	浅黄橙 (10YR8/4)	C40	
70	7-4	灰釉陶器 鉢	D3 SK10	15.4	-	-	ft-ロクロナデ、口縁部施釉 ih-ロクロナデ、施釉	密 (6mmの小石1個含む)	良	灰白 (5Y7/2)	C10	折戸53号窯型式 内外面に鉄釉に灰釉
71	6-5	陶器 片口鉢	C1, C3, D3, (D2) SK10 (SK5)	30.2	-	-	ft-ロクロナデ、指オサエ-指ナデ、板ナデ ih-ヨコナデ、ヘラ描き櫛目1条/単位	やや密 (5~7mm砂粒含む)	良	にぶい橙 (7.5YR6/3) 橙 (7.5YR7/6)	C25	常滑製品第11~12型式
72	7-6	陶器 壺	D3 SK10	31.6	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ	やや密 (5~7mm砂粒含む)	良	灰褐 (5YR6/2)	C10	常滑製品第8型式 内面に自然釉かかる
73	7-7	陶器 広口壺	D3 SK10	18.0	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ	やや粗 (1~5mm砂粒・小石含む)	良	にぶい赤橙 (2.5YR6/4)	C20	常滑製品第10型式
74	14-4	土師器 羽釜	D3 SK10	23.8 鍔径 27.5	-	-	ft-ヨコナデ、ナナメハケ、芯孔1組2孔2方向、鍔貼付 ih-ヨコナデ、板ナデ	やや密 (0.5~5mm砂粒・小石含む)	良	浅黄橙 (10YR6/4) にぶい黄橙 (10YR7/4)	C80	口縁部至みあり (瀬戸系) 外面にススが付着
75	14-2	土師器 羽釜	D3 SK10	21.8 鍔径 25.2	-	-	ft-ヨコナデ、指オサエのちヨコナデ、鍔貼付、横方向板ナデか ih-ヨコナデ、指オサエのちヨコナデ 工具ハケ2条/3.7	密 (0.5~2mm砂粒少量含む)	良	橙 (7.5YR7/6)	C15	外面にススが付着
76	14-1	土師器 羽釜	D3 SK10	15.8 鍔径 19.5	-	-	ft-ヨコナデ、芯孔1組2孔2方向、鍔貼付 ih-ヨコナデ、ヨコハケ-ヨコナデ	密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	橙 (5YR6/6)	C60	外面にススが付着
77	14-3	土師器 茶釜	D3 SK10	13.4	-	-	ft-ヨコナデ ih-ヨコナデ	密 (0.5~4mm砂粒含む)	良	橙 (5YR7/6)	C55	
78	8-1	陶器 片口鉢	E3 片口鉢	27.2	-	-	ft-ロクロナデ、タテケズリ、ロクロケズリ ih-ロクロナデ　使用痕あり	やや密 (1~5mmの小石含む)	良	灰 (5Y5/1)	C10	瀬戸美濃窯製品 古瀬戸後1期
79	7-8	陶器 広口壺	D4, E3, (D3) SK11 (SK10)	21.4	-	-	ft-ロクロナデ、指オサエのちヨコナデ ih-ロクロナデ、ヨコナデ	やや粗 (1~5mm砂粒含む)	良	灰褐 (7.5YR5/2)	C40	常滑製品第10型式
80	8-2	陶器 広口壺	E3 SK11	15.6	-	-	ft-ロクロナデ、板ナデのちヨコナデ、押印文2箇、櫛波 ih-ロクロナデ、指オサエ-ナデ、ヨコナデ	やや粗 (0.5~5mm砂粒含む)	やや良	灰白 (10YR7/1) にぶい黄橙 (10YR7/2)	C20	常滑製品第6型式
81	7-5	陶器 壺	E3 SK11	-	-	-	ft-ロクロナデ、ナデ ih-ロクロナデ、ナデ	やや粗 (1~5mm砂粒含む)	良	灰褐 (7.5YR5/2)	小片	常滑製品第9型式
82	14-5	土師器 皿	D1, E3 SK11 西半	7.9	4.3	1.3	ft-ヨコナデ、鍔貼 ih-指頭	密 (0.5~1mm砂粒含む)	良	浅黄橙 (10YR8/3)	C30	
83	8-3	陶器 壺	D1, E3 SK11	10.0	9.8	-	ft-ロクロナデ、底部文、ロクロケズリ、五1枚(上部に4条櫛)、貼付高台 ih-ロクロナデ、ヘラ状工具ロクロナデ	やや密 (0.5~4mm砂粒含む)	やや良	灰白 (2.5Y8/2)	C20 底20	瀬戸美濃窯製品 古瀬戸前後期 体表の灰釉剥離

第5表　遺物観察表③

報告書番号	実測番号	器種	出土位置 出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	現存度(%)	備考
84	9-1	陶器 壺か	F4 SD13	-	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ、櫛目	密	良	灰褐 (5YR5/2)	小片	瀬戸美濃窯製品 大窯第2~4段階 優鉄主釉
85	14-7	土師器 土鍋	C3, E4 SD13	最大径 2.2	孔径 1.2	厚さ 4.7	磨滅	密	やや良	にぶい橙 (5YR7/4)	100	重量：14.23g
86	9-2	陶器 山茶碗	F2 SK14 南半	-	7.5	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 底面に敷き示くわあり ih-ロクロナデ　使用痕あり	密	良	灰白 (2.5Y7/1)	底85	尾張型第3形式 内面に自然釉かかる 底面に墨孔あ
87	9-3	陶器 山皿	F2 SK14 南半	8.2	4.6	2.6	ft-ロクロナデ、貼付高台、モミガラ痕 ih-ロクロナデ	やや密 (0.5~4mm砂粒含む)	良	灰白 (10YR8/1)	C20 底100	内面に自然釉かかる 底面に墨孔あ
88	9-6	陶器 須恵	F3 SK14	29.0	-	-	ft-ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉 ih-ロクロナデ、施釉	やや密 (1~2mm砂粒少量含む)	良	にぶい橙 (5YR7/4) 浅黄橙 (10YR8/4)	C15	瀬戸美濃窯品 古瀬戸後期 内外面に灰釉、黒白 (7.5Y7/2)
89	9-7	陶器 広口壺	F3 SK14	25.4	-	-	ft-ロクロナデ、指オサエのちヨコナデ ih-ロクロナデ	やや密 (1~2mm砂粒・小石含む)	良	灰白 (5YR8/2)	C10	常滑製品第8型式 内面口縁部に自然釉かかる
90	9-4	陶器 壺	F2 SK14 南半	23.8	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ、 指オサエ-タテナデのちヨコナデ	やや密 (0.5~4mm砂粒含む)	良	褐灰 (5YR4/1)	小片	常滑製品第10型式
91	14-8	土師器 皿	F3 SK14 南半	8.8	-	-	ft-ヨコナデ、ナデ ih-ヨコナデ	密	良	浅黄橙 (10YR8/3) 橙 (7.5R6/6)	C75	
92	14-6	土師器 皿	F3 SK14 北半	最大径 4.3	孔径 0.7	厚さ 3.4	ナデ	やや密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	橙 (5YR7/6)	100	重量：63.91g
93	9-5	陶器 片口鉢	E2 SK15 南半	28.4	-	-	ft-ロクロナデ タテ方向ケズリのちロクロケズリ ih-ロクロナデ	やや粗 (1~4mm砂粒含む)	良	灰白 (2.5Y7/1)	C10	内外面に自然釉かかる 内面に粘土付着
94	9-8	灰釉陶器 碗	G3 SK17 東半	-	6.7	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、砂粒痕 ih-ロクロナデ　使用痕あり	密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	灰白 (2.5Y8/2)	底25	百代寺窯型式
95	15-1	土師器 皿	上層 SK17	10.7	6.4	2.3	ft-ヨコナデ、指オサエ-ヨコナデ、磨滅 ih-ヨコナデ、磨滅	密 (0.5~1mm砂粒含む)	良	浅黄橙 (10YR8/3)	C35	
96	15-2	土師器 皿	上層 SK17	12.8	6.8	3.0	ft-ヨコナデ、磨滅 ih-ヨコナデ、磨滅	密 (0.5~1mm砂粒含む)	良	浅黄橙 (10YR8/3)	C35	口縁部至みあ
97	15-3	土師器 皿	SK17 西半	26.7	-	-	ft-ヨコナデ、ヨコハケ、磨滅 ih-ヨコナデ、指オサエ、磨滅	やや密 (0.5~4mm砂粒含む)	良	浅黄橙 (10YR8/3) 紅黄褐	C30	焼伊勢系 外面にススが付着
98	10-3	陶器 山茶碗	G3 SK19	-	-	-	ft-ロクロナデ、糸切痕 ih-ロクロナデ、指ナデ ft-ロクロケズリ、糸切のち削り出し高台、 糸切痕、施釉	やや密 (1~5mm砂粒・小石含む)	良	灰白 (2.5Y7/1)	C45 底100	窯み多り
99	10-2	陶器 天目茶碗	G3 SK19	11.9	4.2	5.9	ih-ロクロナデ、指オサエ、糸切痕 ih-施釉	密	良	灰白 (10YR8/2)	50 C30 底85	瀬戸美濃窯製品 古瀬戸後1期 内外面に鉄釉、黒釉 (5YR3.7/1)
100	10-6	陶器 山茶碗	SE20	-	7.8	-	ft-ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 ih-ロクロナデ	やや密 (0.5~4mm砂粒含む)	やや良	灰白 (2.5Y8/2)	底100	尾張型第5形式
101	10-5	陶器 天目茶碗	下層 SE20	11.8	-	-	ft-ロクロケズリ、施釉 ih-施釉	密	良	灰褐 (5YR4/2) 灰白 (10YR8/2)	C10	瀬戸美濃窯製品 大窯第3段階 内外面に灰釉、灰白 (2.5YR2/1)
102	6-6	陶器 片口鉢	C4 (C4, C3, D3) SE20 (SK4, SK5, SK10)	28.4	13.4	9.3	ft-ヨコナデ、板ナデ-ナデ、磨滅 ih-ヨコナデ、ヘラ描き櫛目1条/単位 使用痕あり	やや粗 (1~11mmの砂粒・小石含む)	良	にぶい赤橙 (5YR6/4) 橙 (7.5YR7/6)	C20	常滑製品第11~12型式
103	10-8	灰釉陶器 片口鉢	E3 SE20	-	-	5.8	ft-ロクロナデ、糸切痕、施釉 ih-ロクロナデ	密	良	灰白 (2.5Y8/2)	底15	瀬戸美濃窯製品 花筒1類 外面に施釉、流黄 (5Y7/2)
104	10-4	陶器 壺	G4 SE20	-	-	-	ft-ロクロナデ、板ナデのちヨコナデ ih-ロクロナデ、指オサエ-ナデ	やや密 (0.5~6, 5mm砂粒含む)	良	灰黄褐 (10YR6/2) にぶい橙 (7.5YR6/4)	小片	常滑製品第9型式
105	10-9	陶器 壺	下層 SE20	32.0	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ	やや粗 (0.5~3mm砂粒含む)	良	灰褐 (2.5YR5/2) 赤橙 (10R6/6)	C10	常滑製品第10型式
106	10-7	陶器 広口壺	下層 SE20	21.0	-	-	ft-自然釉(背白色、黄白色) ih-ロクロナデ、指オサエ	やや密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	灰褐 (10YR5/1) 灰白 (10YR7/1)	C20	常滑製品第12型式 外面に自然釉かかる
107	15-4	土師器 皿	下層 SE20	11.9	8.1	-	ft-ヨコナデ、指オサエ-ナデ ih-ヨコナデ	密 (3mm砂粒1個含む)	良	灰黄 (2.5Y7/2) 黄灰 (2.5Y5/1)	C20	灯明皿か
108	15-6	土師器 皿	下層 SE20	21.4 鍔径 26.4	-	-	ft-ヨコナデ、芯孔、鍔貼付 ih-ヨコナデ、指オサエのちヨコナデ	やや密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	浅黄橙 (10YR8/3)	C20	外面にススが付着
109	15-5	土師器 羽釜	下層 SE20	20.5 鍔径 24.6	-	-	ft-ヨコナデ、芯孔、鍔貼付、ヨコハケ ih-ヨコナデ、ナデ	やや密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	橙 (5YR7/6)	C20	外面にススが付着 内面に炭化物付着
110	11-1	石製品 石仏	下層 SE20	タテ 21.3	ヨコ 19.4	厚さ 7.3	-	-	-	-	-	砂岩製 頭部以上欠損 重量：4.78kg
111	15-7	土師器 羽釜	下層 SK21	21.6 鍔径 25.6	-	-	ft-ヨコナデ、鍔貼付 ih-ヨコナデ、板ナデ	やや密 (0.5~3mm砂粒含む)	良	にぶい黄橙 (10YR7/4)	C10	外面にススが付着
112	5-6	陶器 壺	B4 包含層	38.2	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ、指オサエ-指ナデ-ロクロナデ	やや密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	褐灰 (5YR4/1)	C15	常滑製品第10型式
113	5-5	陶器 広口壺	B3 包含層	26.4	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ、指オサエ-指ナデ-ロクロナデ	やや粗 (1~5mm砂粒・小石を含む)	良	灰褐 (7.5YR4/2)	C20	常滑製品7型式
114	6-2	陶器 壺	B3 包含層	-	-	-	ft-ロクロナデ ih-ロクロナデ	やや密 (0.5~4mm砂粒含む)	良	明灰 (7.5YR4/1)	小片	常滑製品10型式
115	14-6	陶器	表土	最大径 3.8	孔径 1.9	厚さ 4.9	指オサエ-ナデ	密	良	にぶい橙 (5YR6/4)	100	常滑製品 重量：58.72g
116	5-2	陶器 折縁中皿	B3 包含層	19.2	6.4	4.4	ft-ロクロナデ、糸切痕、施釉 ih-ロクロナデ、施釉	やや密	良	浅黄橙 (10YR8/3) 橙 (5YR7/6)	C10 底35	瀬戸美濃窯製品 古瀬戸後1期 内外面に施釉、灰黄
117	6-1	須恵器 鉢か	F3 包含層	-	-	-	ft-ナデ、ロクロナデ-ハケ ih-ナデ、ロクロナデ	密 (0.5~1mm砂粒含む)	良	灰 (N6/0)	小片	内面に粘土付着
118	5-1	陶器 加工片錘	B1 包含層	タテ 3.5	ヨコ 3.7	厚さ 1.3	陶器製品の体部を打ち欠き加工	密 (0.5~2mm砂粒含む)	良	黄灰 (2.5Y7/2)	100	唐・宋期に施釉、にぶい赤褐 (5YR4/4) 重量：2.1g
119	16-2	石製品 砥石	B1 包含層	タテ 6.1	ヨコ 3.3	厚さ 3.7	-	-	-	浅黄橙 (10YR8/3)	-	重量：128g 石質：凝灰岩
120	12-3	石製品 砥石	B1 包含層	タテ 11.4 以上	ヨコ 6.5 以上	厚さ 3.6 以下	-	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	-	重量：500g 石質：砂岩

V　調査のまとめと検討

1　上野１号墳の位置づけ

上野１号墳は、これまで後期古墳が確認されていなかった阿倉川地域で新たに確認された古墳である。当地の古墳としては比較的大ぶりの石材を使用した横穴式石室を有することが特徴で、構築時期は出土した須恵器から６世紀後半頃と考えられる。

近隣で本古墳と類似した石室を持つ古墳としては、北北東約3.5kmに所在した久留倍遺跡SX141がある。[1] この古墳は、久留倍遺跡第３次調査で確認されたもので、盗掘により大きく破壊されていたが、最大幅1.7m、長さ3.5mの疑似両袖式かと思われる石室の基底部が検出された。床面は礫敷となっており、石室石材は亜円礫～亜角礫状を呈し、礫径30～150cm程度の砂岩・礫岩・礫質砂岩である。出土遺物は、６世紀後半から７世紀中葉の須恵器のほか、鉄鏃・刀子などの鉄製品、滑石製臼玉などの玉類があり、上野１号墳と似通った構成であることがわかる。

石室石材の産地は、上野１号墳では員弁川上流域に産する砂岩であると鑑定されている。久留倍遺跡SX141では、美濃帯中・古生界に由来する礫であると判断され、詳細な産地は員弁川水系由来の可能性もあると指摘されている。久留倍遺跡SX141の石材が現存しないので確定はできないものの、石材は両方とも員弁川水系から搬入された砂岩を使用していた可能性が高い。

両者の立地について見ると、上野１号墳は上野遺跡がある丘陵の南方に突出した突端部にあり（第２図・第３図参照）、かつて周囲が低地であったことを考えれば、遺跡内ではさほど高い場所ではないものの、目立った存在であったと推定される。久留倍遺跡SX141は、同遺跡内の最高所に位置し、極めて眺望が良好な立地である。

以上のように、上野１号墳と久留倍遺跡SX141は共通点が多く見いだされる。近隣の同時期の横穴式石室古墳としては、平津町の八幡古墳[2]や、小牧町の筆ケ崎古墳群[3]があるが、これらはやや内陸にあり、石室には比較的小ぶりの石材を使用し、石材も近傍で入手できる花崗岩などを用いている。上野１号墳、久留倍遺跡SX141は共に海蔵川、朝明川の河口付近の目立つ場所に立地し、員弁川水系から石材を搬入していると考えられる点から、同時期の水運に関わった支配者層を被葬者として想定しておきたい。

2　中世の遺構について

今回の調査では第１次・第２次調査で検出されたような建物跡は確認されず、土坑と溝のみが検出された。出土遺物は、中世後期の土師器・陶器類が中心で、異なる遺構間で出土した破片が接合したものもある。調査地が遺跡の縁辺部であることから、集落の不用品廃棄場所であり、頻繁に土坑の掘り直しがあったと考えられる。さらに、蔵骨器の可能性がある古瀬戸四耳壺や常滑焼広口壺が出土している点から、調査地周辺に中世墓も存在したと考えられる。

3　ＳＥ２０出土の石仏について

SE20の最下層からは、石仏（110）が出土している。この石仏と同型の資料は、市内平津町の八幡神社境内の祠に安置された石仏に類例がある。ここにはもう１体、上部を三角形に尖らせ、前面を長方形に彫り込んで像を陽刻するタイプの石仏が並んで安置されている。これと同種の石仏が桑名市の志知南浦遺跡で検出された中世後期の井戸SE58で出土しており、この井戸の埋没上限年代から石仏の所属時期の一端は16世紀末に置くことができるとされている。[4] 上野遺跡SE20は、出土遺物から16世紀後半台を埋没年代の上限と考えることができるため、石仏もその頃の所産と見られ、志知南浦遺跡例と合わせ、16世紀後半から末頃の当地における石仏の様相を知ることができる資料と言えよう。　（山本）

【註】

① 四日市市教育委員会『久留倍遺跡５』2013

② 四日市市教育委員会『四日市の後期古墳』1973

③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT建設に伴う）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ）』2014

④ 三重県埋蔵文化財センター『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008

調査区全景（東から）

調査区北部全景（北西から）

上野１号墳全景（北東から）

上野１号墳全景（南西から）

上野１号墳玄室遺物出土状況（北から）

上野１号墳玄室遺物出土状況（南東から）

調査前状況（北から）

ＳＫ１７（西から）

上野１号墳完掘状況（北東から）

ＳＫ１９土層断面（西から）

ＳＫ１４土層断面（南から）

ＳＥ２０（南西から）

ＳＫ１５土層断面（南から）

調査後状況（南から）

上野１号墳出土遺物集合

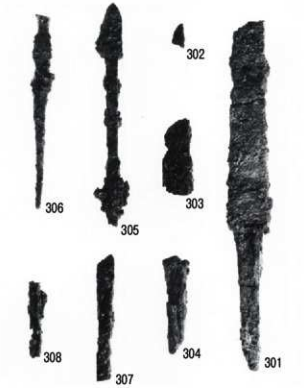
25

66

74

29
35
34
42
41
48

110


302
306
305
303
308
307
304
301

310

301
302
303
304
309
307
305
306
308
66
310

金属製品X線写真

報告書抄録

ふりがな	うえのいせき さん・うえのいちごうふん
書名	上野遺跡3・上野1号墳
シリーズ名	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	54
編著者名	山本達也　川崎志乃　伊藤裕之
編集機関	四日市市教育委員会
所在地	〒510-8601　三重県四日市市諏訪町1番5号　℡059-354-8240
発行年月日	2018(平成30)年 3月31日

所収遺跡名(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
上野遺跡(うえのいせき)	四日市市西阿倉川字上野(よっかいちし にしあくらかわあざ うえの)	24202	479	34° 59′ 06″	136° 37′ 13″	20161201 ～ 20170329	466	宅地造成
上野古墳群1号墳(うえのこふんぐん ごうふん)		24202	585				36.97	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野遺跡	集落跡	弥生・鎌倉・室町	土坑・溝・ピット	土師器・陶器・和鏡・石仏	蔵骨器の可能性がある陶器壺のほか和鏡が出土しており、中世の墓域が想定される。
上野古墳群1号墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器・土師器・鉄鏃・刀子・丸玉・臼玉	新規確認した古墳時代後期の横穴式石室を主体部にもつ古墳。

要約

上野遺跡は、海蔵川左岸の阿倉川台地南端に立地する遺跡である。調査の結果、中世後期の土坑・井戸・溝が検出されたが、建物跡は確認できなかった。遺物は、陶器壺・甕・鉢類や土師器鍋・皿等のほか和鏡、石仏がある。第1次・第2次調査で確認されていた中世集落の縁辺部と考えられ、蔵骨器の可能性がある陶器壺などの存在から、墓域も想定される。

上野古墳群1号墳は、今回の調査区内において新規に確認した古墳である。ほぼ南北に主軸を置く横穴式石室を主体部にもち、石材は員弁川水系の砂岩を用いている。副葬品は須恵器、鹿角装刀子、鉄鏃、玉類がある。6世紀後半の築造とみられ、7世紀前半まで追葬が行われたと考えられる。立地などから当地の水運に関わる支配者層が被葬者として想定される。

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書54

上野遺跡3・上野1号墳

2018(平成30)年 3月31日

編集・発行　四日市市教育委員会

印 刷・PDF作成　有限会社 アドクリ